

令和4年度 教育・保育実践コンパスレポート

～乳幼児教育支援センター事業報告書～

私たちの教育・保育をもっと楽しく！



世田谷区乳幼児教育支援センター

— 目 次 —

I. 世田谷区教育・保育実践コンパスについて	2
II. 乳幼児教育支援センター事業の概要	4
III. 令和4年度 乳幼児教育支援センター研修実績	6
IV. 学び舎の取組み	7
V. モデル研究中間報告【学び舎を起点とした幼保小中連携の充実】	8
【優郷の学び舎】	8
【桜咲く深緑の学び舎】さくらしんまち保育園	9
【みしまの森学舎】三島幼稚園	10
【世田谷杜の学び舎】若林小学校・世田谷保育園	11
VI. モデル研究中間報告【園の教育・保育の評価（自己評価を中心として）】	
希望丘保育園	12
給田幼稚園	16
成育しせい保育園	20
VII. コーディネーター派遣事業報告	24
烏山いちご保育園	24
銀の鈴幼稚園	26
豪徳寺保育園	28
桜丘幼稚園	30
三軒茶屋えほん保育園	32
下馬保育園	34
世田谷はっと保育園	36
八幡山保育園	38
船橋東保育園	40
南奥沢保育園	42
南桜丘保育園	44
南八幡山保育園	46
用賀保育園	48
ラフ・クルー 経堂保育園	50

I. 世田谷区教育・保育実践コンパスについて

1 世田谷区教育・保育実践コンパスとは

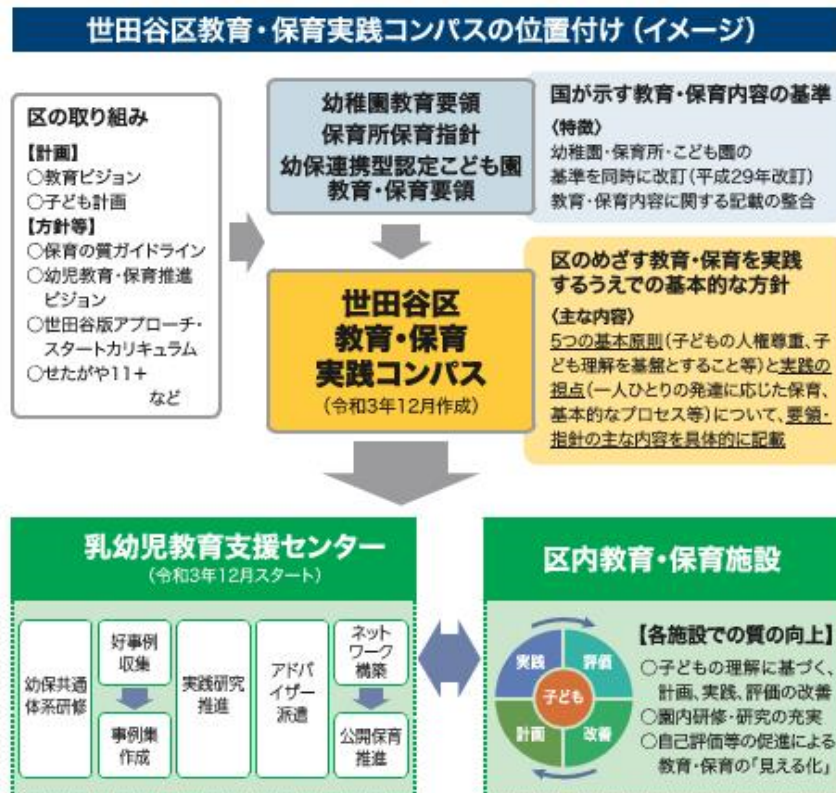
○ 目的

世田谷区は、これまで、「世田谷区幼児教育・保育推進ビジョン」の策定など、乳幼児期の教育・保育の質の向上に向けて様々な取組みを行ってきました。今後さらに、世田谷区の全ての子どもが、インクルーシブな教育・保育の考え方の下に、豊かな経験をしながら成長していけるようにすることが重要です。

- (1) 区では、子どもたちが施設種別に関わらず、質の高い教育・保育を受けることができるよう、「世田谷区教育・保育実践コンパス」（以下「実践コンパス」という）を作成しました。
- (2) 「実践コンパス」は、区内の教育・保育の関係者が施設の種別を問わず共有すべき基本的な方針を示す羅針盤(コンパス)としての役割を担います。

○ 特徴

- (1) 乳幼児期の教育・保育に通底する理念(子どもの人権の尊重など)を基本原則として明確化しました。
- (2) 各施設が実践の充実を図るために活用しやすいよう、計画、評価など実践のプロセスに応じた視点を明示しました。



2 世田谷区教育・保育実践コンパスの構成と主な内容

○ 私たちがめざす乳幼児期の教育・保育の基本

区内全ての教育・保育施設が実践を進める上で基本となる理念・原則を記載

子どもを権利の
主体（一人の人間）
として捉える

子ども一人ひとり
に対する理解を
基盤とする

環境を通して
教育・保育
を行う

育みたい資質・能力、
幼児期の終わりまでに育って
ほしい姿を意識する

保育者が
主体性を
発揮する

○ 実践の視点（例）

発達に即した教育・保育とその過程、家庭や地域と連携した実践について記載

大切にしたい子どもの経験
0～5歳児までの各時期の教育・
保育において育みたい力とその
ために大切にしたい経験

子どもの力を育む保育のプロセス
「教育・保育の基本」を踏まえ、
子どもの理解を基盤とした実践
のプロセスや配慮

教育・保育をつないでいく
子どもの豊かな経験を育み育ち
をつなぐ、園の教育・保育と小中
学校、家庭、地域との連携促進

○ 教育・保育の質の向上に向けた取組みの充実

「実践コンパス」を活用した、関係者の協働による取組みについて記載

研修実施、研究の促進、専門人材の派遣、関係者ネットワークの充実等

3 「世田谷区教育・保育実践コンパス」の活用について

各施設が特色ある教育・保育の実践を充実させていくために、以下に示すような、様々な場面で活用されることを想定しています。

- ◎各園で 保育の振り返りや計画づくりの参考、教育・保育の評価の視点、園内研修のテーマづくりや対話のきっかけ など
- ◎地域で ワークショップや公開保育の協議の視点の参考、小中学校との連携 など

世田谷区は、乳幼児教育支援センターを起点に、研修の充実やアドバイザーの派遣、関係者がつながるための場づくりなど、多様な支援を行っていきます。

Ⅱ. 乳幼児教育支援センター事業の概要

1 乳幼児期の教育・保育の充実と発展

○ 教諭・保育士の人材育成

(1) 乳幼児教育支援センター研修 (P6 参照)

(2) 実践充実コーディネーター派遣

〈目的〉

各幼稚園・保育所等が実践コンパスを活用しながら、それぞれの園での実践を振り返り、自己評価に取り組むことにより、自園の強みと課題を見出し、より良い教育・保育実践を進めていくための支援を行います。

〈コーディネーターの役割〉

- ・ 支持的・協動的な姿勢による支援（良いところをさがす、一緒に考える）
- ・ 実効性・継続性のある取組みに向けた支援（次の一歩が見つかる、無理のない取組み）
- ・ 園の主体性・自律性を育む支援（園の取組みや強みを生かす）

〈各園の取組み〉

- ・ 「実践コンパス」を活用した、実践の振り返り、園の教育・保育の自己評価
- ・ 自己評価結果の公表等

※ 訪問回数は、1園あたり2～3回

実践充実コーディネーター

荒牧 美佐子	目白大学	
石井 章仁	大妻女子大学	
井上 真理子	洗足こども短期大学	
遠藤 純子	昭和女子大学	
大豆生田 啓友	玉川大学	
田澤 里喜	玉川大学	
堀 科	東京家政大学	(五十音順)
スーパーバイザー	無藤 隆	白梅学園大学名誉教授

(3) モデル研究事業

〈目的〉

区では、区内の乳幼児教育・保育施設が行う「実践コンパス」を活用した取組みを支援します。その一環として、各施設が「実践コンパス」を活用した実践を進め、参考となる事例を共有していくために、モデルとなる実践研究を行います。

〈テーマ〉

- ・「学び舎」を起点とした、幼保小中連携の充実
- ・園の教育・保育の評価（自己評価を中心として）

○ 教育・保育施設の円滑な接続・連携促進

- ・ 学び舎等を活用した連携促進
- ・ アプローチ・スタートカリキュラムの実施
- ・ 教育・保育関係者連絡会の開催
- ・ コンパスフォーラムの開催

2 乳幼児の資質・能力を育む環境づくり

○ 文化・芸術体験事業の実施

- ・ 音楽をテーマとした文化・芸術体験→松丘幼稚園、西弦巻保育園
- ・ 体験事業をテーマとした文化・芸術体験→中町保育園
- ・ どこでも文学館→八幡山幼稚園、上用賀保育園

○ 乳幼児期の教育・保育への ICT 活用についての研究・試行

- ・ 言葉の力育成プログラム→砧幼稚園、八幡山幼稚園、駒沢保育園

3 家庭教育の支援

○ 家庭教育・子育て支援講座

～すくすくコンパス～

- ・ 小児医療 「小児医療のかかり方」
- ・ 子どもの権利 「子どもの権利を身近な日常生活の中から学ぶ」
- ・ 子どもとメディア
- ・ おうち性教育

～すくすく広場～

- ・ 保幼・小接続支援ワークショップ
- ・ 読み聞かせ & 交流会

Ⅲ. 令和4年度 乳幼児教育支援センター研修実績

全12研修 総申込者数 1,306名 (12月20日現在)

研修名	研修分野	開催方法	日時	講師名	人数	
キャリアステージ研修	初任研修	初任者研修 (幼保小中合同)	集合	7月21日(木)午前	佐々木 享子 (明治大学)	92
	中堅研修 (基礎)	乳児保育	集合	7月28日(木)午後 11月29日(火)全日	西 智子 (元日本女子大学)	86
		幼児教育	集合	8月1日(月)午後 11月15日(火)全日	若月 芳浩 (玉川大学) 田澤 里喜 (玉川大学)	81
		保護者支援	集合	7月4日(月)午後 10月31日(月)全日	園田 巖 (東京都市大学)	77
		障害児保育	集合	5月30日(月)午後 9月26日(月)全日	福岡 寿 (日本相談支援専門員協会)	76
	中堅研修 (発展)	中堅研修 (発展)	集合	8月3日(水)午後	岩田 恵子 (玉川大学)	88
	管理職研修	管理職研修 (コンパスの理解 と活用)	ワライ	7月12日(火)午後	無藤 隆 (白梅学園大学) 大豆生田 啓友 (玉川大学)	267
分野別研修	教育・保育 の評価	園評価研修 (基礎編)	ワライ	5月26日(木)午後	田澤 里喜 (玉川大学)	131
		園評価研修 (実践編)	①②集合 ③ワライ	① 7月22日(金)午後 ② 8月30日(火)午後 ③ 10月28日(金)午後	石井 章仁 (大妻女子大学) 遠藤 純子 (昭和女子大学)	82
	保育の基本	発達と保育 ※4回シリーズ	①ワライ ②~④ 集合	① 5月25日(水)午後 ② 8月25日(木)午後 ③ 9月12日(月)午後 ④ 12月12日(月)午後	無藤 隆 (白梅学園大学) 古賀 松香 (京都教育大学) 荒牧 美佐子 (目白大学)	75
その他	実践研修	要録研修	集合	11月21日(月)午後	福井 直美 (全国幼児教育研究協会)	127
	人権研修	人権研修	集合	12月6日(火)午後	米原 立将 (流通経済大学)	124

参加者アンケートより

【中堅研修】遊びの方法など提案する引き出しが増えた。保育園と幼稚園の違いはあるが、日常の保育の話ができ、研修を楽しく感じた。

【管理職研修】施設長という立場で一人で孤軍奮闘している感覚に陥ることもあり、このような研修に参加することで、同じ課題を抱えている同じような立場の人がいると思うだけで心強かった。どの園でも苦労されていることや課題となることは同じようなことなのだとわかり、気持ちが楽になった。悩んでいるだけではなく、自園に合った方法を工夫し、園全体が成長できるようにしていきたい。

【初任者研修】初めての外部研修だったが、小中学校の先生方と交流できてよかった。

【園評価研修】保護者との信頼関係を構築するためにも、どういことを大事にして、子どもたちがどのように育ったのかを公表発信することが大切である。それが保育の質の向上につながり、子どもたちのためになることを改めて学んだ。

【保育の基本研修・発達と保育】子どもをよく観察し、今何を感じているのか、今何をしようとしているのかを見ること、そして子どもが主体的に遊べるよう環境を設定していくことが大切だと学んだ。

【人権研修】普通の保育と虐待は隣り合わせであることが分かった。子どもの最善の利益を第一に考え、自分の言動に責任を持ち、より良い人的環境となるような保育をしていきたいと思った。

IV. 学び舎の取組み

1 「学び舎」とは

中学校区を単位に、近隣の区立小中学校で構成し、各学校と地域が一体となって質の高い教育活動を進めていくための世田谷区独自の仕組みとして始まりました。また、令和2年度から区立幼稚園が参加するようになりました。

令和4年度からは、乳幼児期の教育・保育が乳幼児期から義務教育終了時までを見据えたものとなるよう、施設の種別を越えた幼保小中の交流・連携を一層促進するために、私立幼稚園・公私立保育園等の「学び舎」への参加をお願いしました。

2 「学び舎」への乳幼児教育・保育施設の参加状況（令和5年2月時点）

世田谷区には29の学び舎があり、参加施設の多い地域では8つもの施設に参加、連携していただいています。

○参加施設

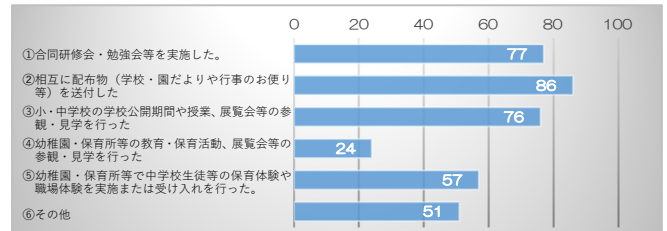
区立幼稚園 8園 区立保育園 46園 私立幼稚園 4園 私立保育園 59園 合計 117園

3 「学び舎」活動に係るアンケート実施結果（令和5年2月実施）

小中学校を含む学び舎を構成する210施設（うち、138施設の回答）を対象にアンケートを実施しました。

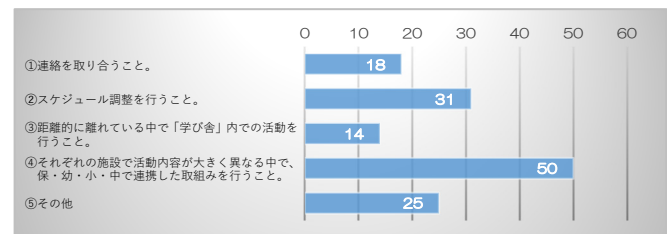
①令和4年度に実施した「学び舎」活動（複数回答有）

「②配布物を相互に送付すること」が最も多く実施されておりました。また、「①合同研修会や勉強会の実施」や「③学校や④園への参観・見学」も多く実施されており、学び舎が各学校と地域の園の連携を促進する一助になっています。



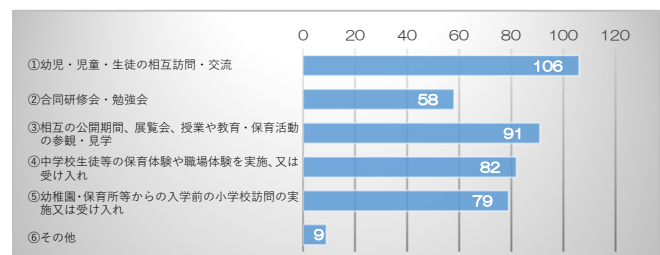
②「学び舎」活動を実施する上で特に難しいと感じたこと

「④施設の活動内容が異なる中で連携した取組みを行うこと」が多く挙げられておりました。区が蓄積していく具体的な活動事例等を共有し、連携活動への支援を行います。また、連絡やスケジュール調整等については、実状等を踏まえながら、可能な支援を行います。



③今後の「学び舎」活動で実現したいこと（複数回答有）

「①幼児、児童、生徒の相互訪問や交流」や「③授業等・教育保育活動への参観・見学」「④保育体験、職場体験」等の相互交流を要望する声が多く挙がっておりました。実状等を踏まえながら、可能な支援を行います。



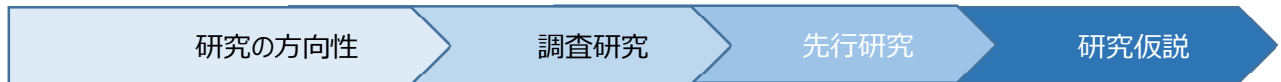
V. モデル研究中間報告【学び舎を起点とした幼保小中連携の充実】

【優郷の学び舎】

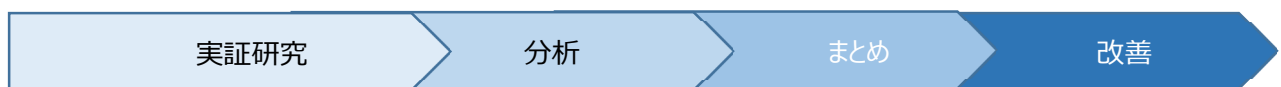
～連携を適切に構築するための研究～

【幼稚園教育要領（平成29年告示）第1章総則、保育所保育指針（平成29年告示）第2章保育の内容、幼保連携型認定こども園教育・保育要領（平成29年告示）第1章総則、小学校学習指導要領（平成29年告示）第1章総則】
就学前教育と小学校教育との円滑な接続が求められている。

1年目（令和4年度）



2年目（令和5年度）



課題 【世田谷区立小学校の就学前教育との接続実態】

「幼稚園・保育園・認定こども園と子ども同士の交流活動を実施した校数の割合（全61校）」

- 令和2年度…26%（16校）
- 令和3年度…54%（33校）

「幼稚園・保育園・認定こども園と教員の交流活動を実施した校数の割合（全61校）」

- 令和3年度…82%（50校）

➔ 世田谷区では、円滑な接続に向けた教育活動を全校で着実に実施することに課題がある。

調査研究

○先生の話を一息懸命聞き、ピアノに集中している姿を見ることができ、嬉しかったです。私の保育園の年長の担任にもぜひ見てもらって、様々なことを感じてほしいと思いました。（保育園 保育士）

○年長組の担任をしておりますので、1年生の姿から、身支度の仕方や手順など、しっかり身に付けてある程度の時間で行えるようにしておくことが、学校生活への安心材料になると感じました。（幼稚園 教諭）

弦巻小「学び舎の日 参観者アンケート」より

先行研究「幼小接続期カリキュラム全国自治体調査の分析（国立教育政策研究所）」より

- **考察：適切に構成された接続期カリキュラムの特徴**
- **目指す子供の姿、育てたい力が明確。強調したい視点が明確。**
- **柱立てやより詳細な視点がアプローチとスタートの両方に位置づく。→つながり（接続）が見える。すり合わせがされている。**
- **カリキュラムに、交流連携計画、環境構成や授業の工夫（朝の楽しい時間、モジュール設定等）、援助・支援や指導の工夫・配慮、家庭との連携、特別支援（別冊を含む）が位置づく。**
- **実践事例・実践例が、柱立てに沿って考察され、事例の中で幼保小のつながりを示す工夫がなされている。研修への活用も可能。**
例）事例での幼小のつながりを示す欄の設定、柱に沿って幼小の事例・単元のつながりを分かりやすく紹介

令和5年度に向けた研究仮説

「世田谷区教育・保育実践コンパス」に基づき、適切に構成された接続期カリキュラムを実践することで連携を適切に構築することができるだろう。

1 <深沢中学校とのミーティング>

議案 1)お互いの紹介

深沢中学校の校長先生をはじめ、主事さんや栄養士さんも同席して頂き、スライドを使ってさくらしんまち保育園のご紹介と保育園での『食育』実践について話しました。卒園児が深沢中学校に在籍していることもあり、和やかな雰囲気の中でお互いを知り合うことができました。

議案 2)食育での取り組み

その後、深沢中学校でも豊かな食育活動を実践されていることを知り、桜咲く深緑の学び舎としては、是非食育の部分でコラボレーションし、双方の子ども達の成長や職員の育成に資する活動を行うことになりました。

2 <アドバイザーとの相談>

相談内容 1)

上記の大きな方針は決まっているものの、今年度中はまだコロナ禍にあり、保育園と中学校の約 2km という距離の壁、年齢の差という課題もあり、初動が取れずにいました。その部分を有識者の箕輪先生にご相談しました。具体的な相談の中で可能な範囲を探り、感染症の動向を鑑みつつ最初の一步を踏み出すアクションプランを練ることができました。

相談内容 2)

中学校では学校に行けていない生徒もあり、その生徒がボランティアや職場体験の機会に保育園に来て頂くことで、自らの有用感や達成感、貢献心を感じ、充実感を持って保育園を後にすることがしばしばありました。この部分でも協同できればという保育園側の思いを話し、上記の初動から一歩ずつ進める中で、その様な取り組みに発展する可能性を確認することができました。

3 <深沢中学校との交流実績>

実際に 2/1(水)から 2/3(金)までの 3 日間、職場体験として深沢中学校の生徒を受け入れました。3.4.5 歳の子ども達が在籍する幼児クラスに入り、子ども達と触れ合いながら、生活と遊びを共にしてもらいました。小さな先生として子ども達にも大人気で、生徒本人も充実感を語ってくれました。最終日には横顔に自信をにじませていました。この様な交流が有意義であることを再認識する機会にもなりました。

4 <これからの活動計画>

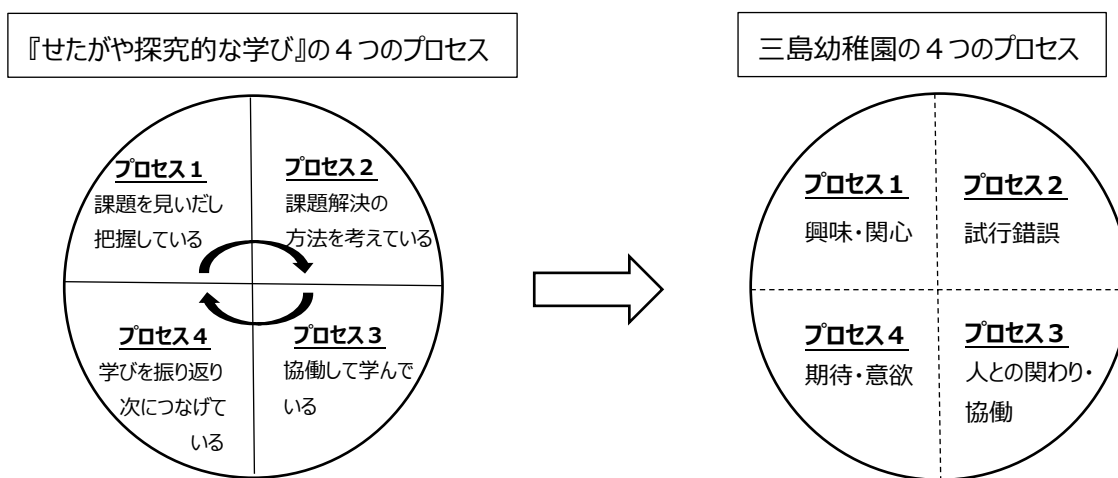
前述の通り、まずは『食育』の部分で関わっていくこととなります。さくらしんまち保育園の園児がバスを利用して中学校に出向くことから始めたいと計画しています。その結果を振り返り、次の一手を検討したいと考えています。来年度は少しコロナ対応も落ち着くことが予想されますので、活動に拍車がかかると思われます。

【みしまの森学舎 区立三島幼稚園】

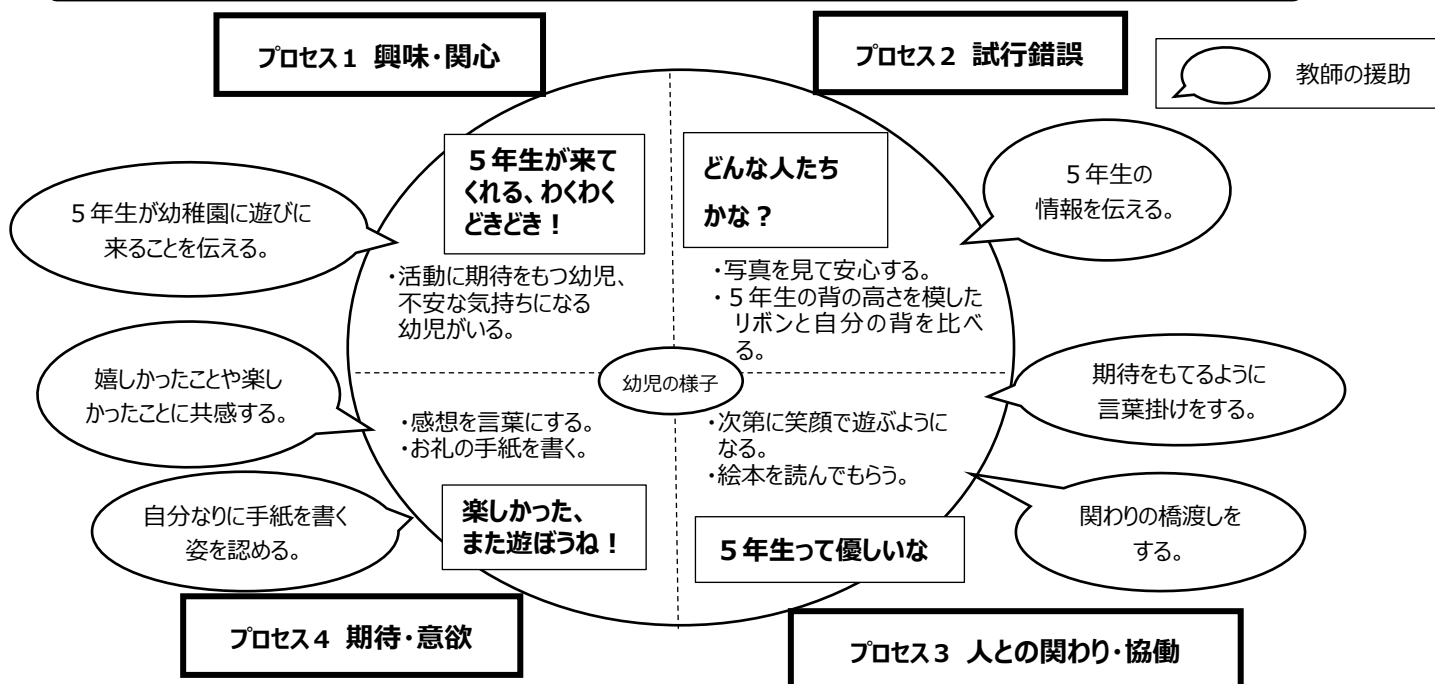
～幼児期と義務教育期との円滑な接続『せたがや探究的な学び』を通して～

今年度、三島幼稚園は「自分で考え行動する幼児の育成～幼児が主体的に考え行動できるようになるための教師の言葉掛け・援助」をテーマに園内研究を進めてきました。教師は、今、目の前にいる幼児の姿だけを見るのではなく、就学後も自分で考え行動する人に育ってほしいと願って、日々保育をしています。そのために、教師ができることは何かと先まで見据えて園内研究に取り組んでいます。

幼稚園は、日々、探究的な活動を繰り返していると捉え、「『せたがや探究的な学び』の手引き」の“探究のサイクル”を元に幼稚園独自の4つのプロセスを考え、事例検討を進めてきました。



みしまの森学舎での活動における探究的な学びのサイクル～小学校5年生との交流を通して～



今後も、乳幼児期から義務教育期へと円滑に接続していくためには、校種を超えて教員同士が連携し、互いの実態、発達、教育を正しく相互理解していくことが大切だと考えます。

【世田谷杜の学び舎】区立若林小学校・区立世田谷保育園

やってみたいな もっとやってみたいな～幼児期教育・保育と小学校教育をつなぐ～

◆取り組み内容（職員・児童園児の交流）



【5月】小学校こいのぼり見学



【8月】保育園・小学校 職員交流会



【10月】小学校体育発表会練習 本番 見学



【11月】小学校音楽会 見学



【12月】小学校（代表委員会）あいさつ運動



【12月】小学校（1年生）お店ごっこ



【12月】保育園施設見学（小学校教員）



【2月】小学校（5年生）交流会

◆成果

- ・同一敷地内に立地していることで、教職員間の交流に留まらず、園児・児童同士の交流も深めていくことができた。また、それぞれの実践活動を通じて、職員同士がそれぞれの現場への理解や子どもの姿、援助方法を学ぶことにより、過去・現在・未来へと続く長期的な視点での支援を見出すことができた。
- ・保育園…年長児クラスを中心に小学校児童と関わり、授業や行事を直接見ることで日常生活では体感できない貴重な経験となり、就学に対する興味や関心、見通しをもつことに繋がった。さらに、こうした取り組みが保護者への就学に向けたアプローチの一つとなった。
- ・小学校…新1年生との関わりを通して、思いやりの心を育むことができた。また、異年齢交流を通して児童の社会性を育むことができた。

園の教育・保育の評価 モデル研究中間報告



世田谷区立希望丘保育園

講師：玉川大学 田澤 里喜氏

**テーマ 「子どもの（各クラスの）育ちの姿を共有し、
保育の質の向上につなげていく。」**

テーマ設定の理由

・大型園でありクラス数が多い。また、施設の構造上、隣の学年の様子が見えない。そのため、自分の受け持つ学年以外の子どもことや、保育について互いに共有がしにくい。保育の評価をするために、まずは、互いの事を知る、情報を共有するところが第一歩となる。大きな組織の中で、共有し合う場を作り、保育の質を高め合っていく方法を2年間かけて深めていきたいと考えたため。

内容と方法

○昨年度から行っている「いいねボード」（情報共有ホワイトボード）の活用

- ・各学年の伝えたい思いを整理し、伝わりやすくする（ポイントを絞る）
- ・付箋を活用した意見交換

○育ちの記録の活用

- ・今まで書いた育ちの記録の中で、自分の「ベスト」と思う記録を発表し、子どもの育ちや、保育の視点の共有を図る。

2年間のスケジュール

- ・1年目は、枠組み（いいねボードの整理、クラスだよりや、ポイントの絞り方、育ちの記録の発表の場の確保、時間、発表方法など）の整理。
- ・2年目は、語り合いを深め、振り返り、評価につなげていく方法を実践していく。

取組みのプロセス

○現状と課題

- ・クラスだよりを出すたびに次々にボードに貼っているため、枚数がたくさんとなり、どれを見ていいのかわからない。
- ・どこに付箋を貼っていいのかよくわからない。
- ・各学年ごとに書き込めるホワイトボードを作ったが、記入はほとんど見られず。

○評価の観点

「情報の共有を円滑にさせる」

○改善・充実に向けた検討・実践したこととその経過

(試行してよかったこと、工夫したこと、変化を感じたこと)

5、6月

- ・クラスだよりは1枚にしぼる。
- ・乳児と幼児でホワイトボードを分ける。
- ・虫眼鏡マークをはり、
見てほしいポイントをアピールする。
- ・かわいい付箋を購入し、
貼るモチベーションを高めていく。



結果 それでもなかなか変化が見られない。



リーダー職員の力も借りよう！！



- ・リーダー会で乳児クラスと幼児クラスの担任と一緒に学年打ち合わせの共有をしたい。
- ・付箋は、話を聞きながらその場で書いてはどうか。



10、11、12月実行してみて。

- ・書面で見るとより、話を聞いたほうがモチベーションアップ！
- ・話を聞いた感想ならば、付箋も書きやすい！
- ・悩みも頑張りも共感してもらえる！ 楽しい！！



○今年は、情報共有ボードを中心に改善、検討を行っていった。
後半はリーダー職員とともに、検討、実践を行ってきた。リーダー職員が全学年の現状を把握することで、園内の調整もスムーズになってきている。

○**取組みを通して見えてきた園の強み**

職員層が厚く、リーダー・中堅・若手それぞれバランス良くそろっている。

○**公表の方法と活用**

事務所だよりを作成し、職員の取組みを保護者に伝えていく。

振り返りと次年度の取組み目標

○今年度は、話し合う場の枠組み作りを目標に取り組んできた。
紆余曲折ありながらも、少しずつ、情報を共有する場づくりが進んできている。

○来年度は、共有する情報の内容についても深めていきたい。

園の教育・保育の評価 モデル研究中間報告



世田谷区立給田幼稚園

講師：大妻女子大学 石井 章仁氏

研究テーマ



幼児の育ちは、日々の積み重ねによって培われる。幼児の育ちや様々な経験を今日から明日へつなげていくためには、日々の保育の振り返りが大切である。これまで行ってきた保育の振り返りを、より適切に行うために、実践コンパスを参考にして振り返りの観点を明確にすることで、多面的な幼児理解や、自己評価を保育に活かしたいと考えた。そこで、より良い幼児の育ちや遊びの充実に向けての教師の援助や環境構成を探っていきたいと考え、研究テーマを設定した。

「つながりのある保育を目指して

～振り返りを通して～」

2年間のスケジュール

- 令和4年6月 講師訪問・保育見学
7月 講師訪問・保育見学
7月 園内研究講師による研究保育・協議会
8月 モデル研究連絡会
11月 研究保育・協議会・講師指導（ビデオカンファレンス）
令和5年1月 給田小学校との合同研究における研究保育・協議会
モデル研究公表・講師助言
2月 モデル研究連絡会
3月 モデル研究中間報告
4月～ 講師訪問・研究保育（各学期1回） モデル研究連絡会（年2～3回）
令和6年3月 モデル研究報告会



内容と方法

～実践コンパスより～
『子どもの理解に基づく振り返りを
通じて明日の保育を考える』



- 保育の振り返りを教員間で共有することで、幼児理解を深め、より適切な教師の援助や環境構成につなげていけるようにする。
- 保育の一場面をビデオで撮影し、同じ場面を皆で見えて観点を基に保育の振り返りを行う（ビデオカンファレンス）。その振り返りをした一場面を事例としてまとめる中で、多面的に幼児を理解することを大切にしながら、自己評価をすることで、明日の保育にどのようにつなげるか、具体的に話し合う。



給田小学校との合同研究保育にて公表

- ◇研究保育・協議会を実施し、モデル研究の概要（これまでの事例検討の方法、成果等）を説明
- ◇幼小の協議の中で自己評価の公表と講師助言
- ◇指導案に自己評価の視点を組み込む



～小学校の先生方のアンケート（原文より抜粋）～

「その日の振り返りを学年間で共有したり、対策方法等を考えたりできると、子ども達の成長につながるのだと、振り返りの大切さを学びました」

「ビデオに撮って皆で分析するという手法は、昼間保育をして子どもたちが帰った後に大変では...と思いましたが、あれだけ丁寧に一人一人の様子を見合って話し合うと、担任1人で見るとても多面的に幼児理解ができると思いました」

「年齢が違えど、子どもという相手は同じで、大切なポイントは同じだなと思いました」

振り返りと次年度の取組み目標



<今年度を振り返って>

- 「子どもにとって」を大切に保育を展開
- 教員同士の連携による多面的な幼児理解

<次年度に向けて>

- 自己評価と日々の保育をつなげる、活かせるように
 - ・自己評価の観点を明確にする
 - ・週案における振り返りの項目の検討・改善 など
- 保護者への公表の工夫（紙面での公表などの方法や内容）
- 今年度、園内研修のコーディネーターや振り返り・自己評価の視点、小学校に向けての報告など、講師による助言を活用し進めてきた。今後、振り返りを確実に明日の保育につなげていく園の体制を組織的・継続的に確立していきたい。



園の教育・保育の評価 モデル研究中間報告



社会福祉法人至誠学舎立川 成育しせい保育園

講師：昭和女子大学 遠藤 純子氏

テーマ 主体性を発揮する職場環境

テーマ設定の理由

職員の保育への思いは、ひとりひとり持っているがその思いをみんなで感じあう機会が足りないと感じる。

それぞれの思いを表現する機会を作ること、自信となり、保育の楽しさや子どもの理解につなげていけるのではないかな。

今、実施している自己評価を活用できるものに変えていきたい。

語り合う時間をどう作る？業務の見直しをしていきたい。

語り合う時間の中で、自身の保育を振り返り、職員間で認め合い、信頼関係の中で、思いを伝えあい、学び合いたい。

↑↑↑ 職員が主体性を発揮する環境が保育の質を高める！！ ↑↑↑

2年間のスケジュール



- 1年目** 自己評価（各室報告）の見直しをする
新自己評価（各室報告）作成
園内研修 室長 中堅 モンテッソーリ活動実践研修
コンパスの活用から、実際の保育とつなげる。
- 2年目** 自己評価（各室報告）定着 子ども、保育の理解につなげる。
語り合う時間 語り合うイメージを共有する。
業務、書類内容の見直しをする。

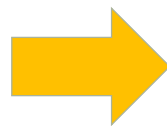
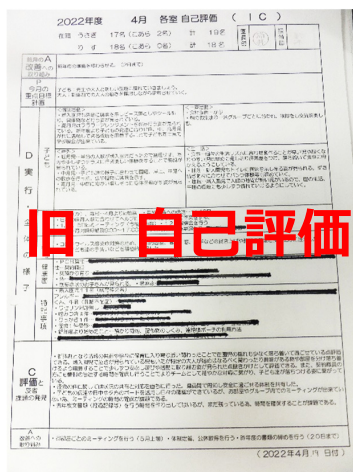
内容と方法

1, 園の自己評価を整理し、活用できる内容にする。

- 各エリアの自己評価（各室報告）の見直し

まずは、形にとらわれず、作成してみよう!!

7月から開始



7月 新自己評価をみてみよう！！



こんなところすてき



聞いてみたい



あったらいいな

遊びの中でどんな変化があったのかもっと知りたいな
 共通した項目があると書きやすいのかな
 具体的に知りたいな
 形式書式があるほうが書きやすいのかな
 共通した項目があれば見やすく比べて参考にしやすいのかな

その後・・・ 7月 自己評価（各室報告）の振り返りを確認したうえで
 8月 ～ 11月まで、それぞれのエリアで、進めていく。



2, 世田谷区教育・保育実践コンパスを活用する

・全職員に配布。

1, 私たちがめざす乳幼児期の教育・保育の基本 P3

5つの項目を職員会議にて共有する時間を設定する。

10月 子どもを権利の主体（一人の人間）として捉える

2, 実践の視点 (1) 大切にしたい子どもの経験 P10

12月 0歳児の保育 1月 1, 2歳児の保育



11月 職員会議 各エリアごとに振り返りを実施

目的



- ・見たい、読みたい、活用できる自己評価（各室報告）を作ってみよう。
- ・保育、子どもの理解につながるツールとなり、語り合う時間を作ろう。

他の先生の
視点に気づ
けた

語り合う
時間は作れ
ていない

この形式でい
いのかな？

普段の保育に
も生かせる



みんなで意見
を出して作り
上げる
ようになった

他の業務と連動
させている
月案など

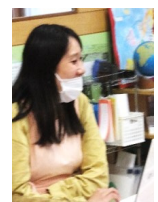


振り返りと次年度の取組み目標

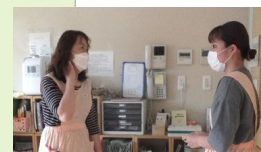


自分で考えること、おもしろいと感じること

手ごたえを感じるとどんどんやってみようと思いがふくらむ。
文章にしてしまうと、本来の思いがもれてしまうことがある。
対話の大切さ。対話からキーワードを見つけて、それぞれの
保育について共有できるように。次につながる振り返りが
大切。職員の語る力。語る側の思いをくみ取り、聞く側にも
その思いを代弁し、思いを導く役割の大切さ。



自己評価（各室報告）をきっかけに
職員の 心 が動き、保育を語り合い
生きた 保育を大切にする



「自園の強み」を見つけよう

◎年度当初の状況と課題◎

昨年度の卒園式の懇談会で「第一希望ではなかったのですが・・・」という保護者が何人かいてショックでした。今年度、入園式でもその話をしたら、うつむいた保護者が何人かいたので、その人たちももしかしたら第一希望ではなかったのかもしれないという出来事がありました。そんなこともあり、職員の間でうちの園の強みって何だろう、と悩み始めました。その後、保育観や道徳観など職員同士でディスカッションし、具体的に表にして自己評価していきました。しかし、コロナ禍ということもあり、園内研修や自分たちの評価に力を入れてきましたが、やはり自園だけでは客観的な発見が出来にくいと感じました。

◎取組みの内容◎

全三回を通してコーディネーターと話し合い「強み」を考えていきました。

第一回 「強み」について

コーディネーターの先生に「強み」は保育にちゃんと根拠があること、という話を受けて、発信していくためには、実際記録として残しているのかということに注目していくことになりました。記録に残ったことが根拠になるという話になりました。

第一回終了～第二回まで

園の取組みの中で、根拠を考えられていない部分が「誕生日会」だったので、誕生日会に焦点を当てて考えることになりました。職員でディスカッションを行い、保育園としての誕生日会の位置づけを誕生日・参加している子どもが全員もれなく楽しめ、特別な日になるように考えていこうという話になり、学年毎にねらいを持って取り組んでいきました。

誕生日とは・・・（ディスカッション）

各クラスにて誕生日とは何なのかのディスカッションをし、「祝う」ということは果たして必要なのか、ということから考えてみました。

晴れの日ってなんだ？
行事としての捉え方、
行事にしている意味。

誕生日は特別感。年を重ねるごとに嬉しがっている。

ということから考えてみました。

日常にも誕生日の歌を歌っている姿もある。真似しやすい、共感しやすい。

祝うって何歳からできる？
感じるのだろうか？友達のこと
どれくらい考えている？

誕生日を祝わない家もある時に、相手のことを考えて祝う機会は作りたい。

子ども達の思いをくみ取る・聞き取る

◎年度当初の状況と課題◎ 「年度末振り返り会議が起点」

子どもと保育者、保護者と保育者、保育者同士が関わり合いながら日々の保育プランを進めてきました。昨年度末に保育の振り返り会議を行う中で「子どもと1対1の言葉かけ」についての反省や効果等の声が多く出てきたことが、課題設定のきっかけとなりました。

単なる指示や同意に終わることなく、言葉かけを幼児理解や子ども達を尊重する視点で振り返ることが大切…との共通認識のうえに、取組みの課題にすることとしました。

自己評価の基準として、保育者の基本中の基本とも思われる「言葉かけ」ということに焦点が当たったことで、今年度当初より、一人ひとりの「言葉かけ」について、自分なりの記録を取りながら、PDCAの手がかりとすることが目的です。

◎取組みの内容◎ 「シンプルな方法でスタート！」

1. 幼児理解と子どもの権利を尊重することを意識する。

毎日の子どもへの言葉かけであるが、実践コンパス「子ども一人ひとりに対する理解を基盤とする」「その子のよさや可能性を捉えていく」という視点を持つこと。また「環境を通して教育・保育を行う」という基本において、保育者は人的環境であるという意識を持つことを共通の課題にしました。言葉かけについては『①否定的な言葉でなく良いところを引き出す ②子どもが前向きになれること』をポイントとすることとしました。記録が日々の負担とならないことも考え、園長が記録シートを作りました。実践の記録は「1対1」の状況のものとなりました。

2. 日々の自分の言葉かけを記録して振り返る。

日々の言葉かけの記録やドキュメンテーションの中から、振り返りのポイントを以下の通りに決めました。

- ① 子どもの表情や視線、行動を察知できた。
- ② 子どもの行動を待てた。先回りした。
- ③ 子どもの気持ちを聞いてみた。
- ④ 子どもに選択肢を提供してみた。
- ⑤ 子どもの気持ちを代弁してみた。
- ⑥ その他



これを記録の中で振り返りの類型①～⑥として分け、自分の言葉かけの傾向が意識できるようにしてみました。

そのうえで記録にはエピソードとして

*どんな姿だったか *言葉かけ前後のあそび推測 *言葉かけの内容 *子どもの反応 *自分なりの評価を記録する定型シートとし、蓄積して研修に臨むこととしました。

◎ 振り返りと今後に向けて ◎ 「保育を語り合うということの意味」

1. 記録の分析により保育を振り返る

井上眞理子先生と共に、全教諭、園長と研修を行いました。

全員の記録にお目通しを頂き、各先生方から特色のある記録を選んで頂き、そのエピソードを振り返りながら、言葉かけの分析や評価を受けました。「保育を語り合う」ということがなぜ大切なのか・・・という提言を頂き、語り合うための材料、可視資料、記録というものが、ありありと子どもと保育者の関わりとして蘇り、確かな振り返りにつながるのだということを実感し、その大切さを改めて認識しました。

井上先生には一人ひとりの記録エピソードを丁寧に聞いていただき、良い意味で深読みしながら、実践や行動の振り返りにつなげて頂いたと思います。「行動の中で瞬時に切り替える」というドナルド・A/ショーンのお話も心に残りました。

2. 保育者の異なる視点が気づきを呼ぶ

「お天気雨は神様が作った」という子どもの不思議感との対話、「うまくいかない気持ち」をどう受け止めて言葉にしているのか、言い出そうとするのを焦らずに待つ、あそびのセンスが異なる子ども同士の折り合い、異なることへのチャレンジを促す、かける言葉によって意欲の方向が変わるという実感、視界に入るものが気になって仕方がない子どもへの声かけ、危険回避予防と語調の関係、遠慮がちで自己肯定の弱い子どもへの声かけ、ほめて取り組む言葉かけや、アイコンタクトやスキンシップを混ぜる・・・、記録エピソードを通じて、子どもとの関わり合いや言葉かけの疑問、悩みを井上先生のコーディネートのもと語り合い、振り返る時間をじっくりと持てました。

3. 話し合いの環境づくり

コーディネートという意味、コーディネーターを交えての話し合いは、『①体制づくり②話題の整理③話すことを保障する④他者からの言葉を受け止めて聞く態度を促す』という公平な園内研修環境が保持されることだと思いました。

教職員内のキャリアや力関係、園長や主任という立場の違い、愚痴に終わってしまう時間・・・等がいつも会議や話し合いの不完全燃焼や虚しさにつながりがちです。

話し合い環境ということが、素直で偏見のない意見を生み出し、ひいては一人ひとりの保育の質向上につながっていくのではないのでしょうか。

4. 今後に向けて

写真や映像データ、手書きメモを利用しながら、幼児理解を目的とした学び（科学）としての意識を持って話す・・・という経験をたくさんしたほうが良いと研修を通じて思いました。

思い付きや茶飲み話ではなく、記録によって子どもの事実や実態を「わかりやすく伝える力」を養うことで、権利や主体性を尊重していく意識につなげていくということを、自園の教育の、また保育者全員の意識として育てていく課題となりました。実践の重点科目として、園 WEB での公表の際、自己評価と関係者評価の項目に導入していくことに加え、子ども一人ひとりを丁寧に捉え、保育者の記録や対話を通じた振り返りの機会が、園の教育の質を向上する重要な取組みになっていることを、保護者や地域に発信し、情報共有することもまた重要な公表の取組みとして位置付けたい。



保育をもっと楽しもう！！

◎年度当初の状況と課題◎

<現状>

各月に行っている保育の打ち合わせでは、各クラスから出る子どものエピソードにあわせて、職員が「子どもにとってどうか」という視点で気づきや意見を出し合い、互いの保育観の共有や保育の質の向上に努めている。しかし、出た意見を保育に取り入れるものの、それを振り返ることや全体で共有することがなかなかできず、自己評価の循環や継続がうまくできずにいるのが現状。

<課題>

- ・保育や仕事の繋がり、継続、循環が課題。
- ・「保育者が主体性を発揮する」という点で、全体的にはきちんと力を発揮しているものの、担当や範疇外のことには気づけない点。個々が主体性を発揮できるような職場づくり。

◎取組みの内容◎

(1回目)

職員をフレッシュ、ミドル、ベテランの3グループに分けそれぞれの年齢層ごとにグループワークを行う。「中堅職員がいきいきと自己発揮できる取組み」について、自園の大きな課題であるとのアドバイスを受け、今後中堅職員が主体性を発揮できるような取組みを行っていく。

(2回目)

1回目の訪問後、中堅職員（ミドル層）対象12名で話し合いを行う。

「中堅職員がいきいきと自己発揮できる取組みについて考える」をテーマに更に年齢ごとの3グループに分け、グループのリーダー3名を決めた。

休憩などを一緒にとりながら、まずは職員のモヤモヤを出し合うことから始める。ここまでの取組みをリーダー3名が経過報告し、改めて浮き彫りになった問題点（コミュニケーション、モチベーション）についての次の取組みの具体的な手立ての方法についてご助言をいただく。

(3回目)

中堅リーダー3名が前回与えられた課題について、それぞれどう取り組んでいたかを報告。

(4回目)

「来年度に向けて豪徳寺保育園が一丸となってどう保育を進めていくか」をテーマに話し合いを進めていく。職員一人ひとりがやろうとする気持ち、互いの認め合いがあるものの、実際に偏りもあるので、職員が誤解なく課題を共有することを目的とし、コーディネーターの先生方にファシリテーターをしていただきながら、職員全員が会議に参加し本音を語り合う機会を作る。

◎ 振り返りと今後に向けて ◎

(1 回目を受けて)

世代別職員の意見交換は新鮮で、新たな気づきがあった。ミドルリーダー層は特に、園内の具体的な課題に気づき、前向きに保育をより良くしていこうというきっかけを得た。

(2 回目を受けて)

保育をもっと楽しむためには、中堅職員が若手職員との自然なコミュニケーションを取ることで、やりたいこと、できることを前向きに捉える組織になっていきたいという雰囲気生まれた。中堅リーダー3人の職員がそれぞれ「自分の得意なことを保育に生かしている姿」「クラスの中でこんなことをやってみた！（祭りシリーズ）と具体的に実行している姿」「さり気なく後輩に声掛けしている姿」「挨拶の時などにプラスの声掛けをしている姿」などが伝わった。

(3 回目を受けて)

日々の保育を楽しむためには職員の心の余裕が必要だと考え、会議の効率化や事務改善などを行ってきた。会議は代表者が出席することで、その時間を休憩などにまわしてきた。事務削減が保育士の休憩やゆとりに繋げることばかりに捉われず、その時間を子どものための保育に繋がることを願っているが、そこに考えのギャップが生じている。（保育を優先して欲しい思い、働き方を優先しがちな考えの歩み寄り）

(4 回目を受けて)

今回のディスカッションではどのチームも「よりよいチームになるため」をテーマに取り上げていた。このことは、組織としての課題意識が芽生え、気づいたこととして、前向きに捉えると良いことをアドバイス頂いた。

■ 研修全体を通して

今回の支援を受けて、一番大切なことは職員同士の「対話」であり、日々の何気ない対話の中に保育のこと、子どものこと、職員のことを理解する要素がある。考えや意図は人それぞれの捉え方になることも大いにあるので、そういった時にはより丁寧に対話していくことを意識していく。

■ 現在クラス、園の中で起きていること

- ・今回は中堅職員 3 名が中心になって取組みを行ってきたが、3 人からそれぞれの中堅職員に広がり、それぞれが若手職員の育成（伝えること、助けること、助けてと声を出し合っていること）を伝え合っている。実際に言い合っているかとなると、クラスの関係性ができているクラスは言えている、そうでないクラスはまだ、とそれぞれである。しかし気軽に言い合える関係性になるためには、コミュニケーションがとれていないとできないことは、どの職員も理解している。中堅職員は後輩職員に、リーダー層、経営層は中堅職員に挨拶の時などにプラスの声掛け、頑張りを認める声掛けをより意識し、実践している。
- ・保育園の課題が浮き彫りになったことで、今後も職員の意見に耳を傾けながら「子どもを中心とした保育の実現」に向け、事務改善など仕事の見直しを早速行い、整理している。
- ・今回提案に上がった、月に一回は全職員が出勤し、定期的に保育に関する大切なことを意識統一する日を今後も設けていく。

■ 次年度に向けたモチベーション

- ・様々な配慮（保育、職員体制、職員の温度差など）を抱えながらのクラス運営の中で、大変、苦しいという思いが優先しがちであった。みんなの共通目標である「子ども中心の保育」を実践するために、みんなで語り合いながら実践していく。

振り返りを通じて明日の保育を考える ～感性をゆさぶる遊びの場面に着目して～

◎年度当初の状況と課題◎

<現状>

- ・保育後に、日々の保育を振り返り、記録や反省をまとめている。また、その日にあったできごとや感じたことなどを話題にし、職員みんなで話している。
- ・園内研究で、エピソードを事例にまとめ分析考察をし、保育者の援助や環境について学び合っている。
- ・それぞれの振り返りや反省を共有し、コロナ禍で制約がある中でも、活動や行事を工夫して実施し、様々な体験をすることができている。

<課題>

- ・記録を書く際に、視点が偏りがちになってしまう。（保育者の援助についての振り返りが多くなってしまう、学級全体の活動についての記録が多くなってしまう、など）
- ・保育を振り返り、保育者同士で話し合う時間を十分にもてるように運営の仕方を考える。
- ・多くの職員で情報を共有できるように方法を考える。細かい援助についても十分に考え合えるように工夫する。
- ・互いの保育の良いところも振り返り、共通理解して取り入れ、保育の向上につなげていきたい。
- ・経験の浅い保育者が、園の実践や課題、自身の課題について、客観的に振り返る機会があるとよい。

◎取組みの内容◎

<ご指導いただいた内容>

- ・「桜丘幼稚園では、何をどう振り返りたいのか」という課題に適した振り返りができるとよい。そのために「見付ける」「発見する」「解決する」ことが大切であり実態に合った振り返り方法を見付けられるとよい。
- ・桜丘幼稚園の強みは、保育者の経験年数のバランスが良く様々な年代の保育者がいることである。
- ・桜丘幼稚園の実態や保育者が感じている課題から次の4点について振り返ることが有効である。
 - ① 振り返りの意味を問い直すこと
 - ② 園に合った振り返りをする
 - ③ 園内研究のテーマに合った振り返りをする
 - ④ 様々な年代の保育者が保育の中で大切にしていることやこだわっていることが、振り返りの中で共有され相互理解へつながること



ステップ1

<振り返りをするために>

保育者同士で振り返りを共有したり、対話したりすることを通して、保育を多角的に見るために、保育中にカメラを携帯して写真を撮る。写真を撮る視点は、①幼児の感性が揺さぶられている場面②一人一人の良さが発揮されている場面③自分が大切にしている保育・関わり・保育観が実現されている場面とし、その写真をもとに保育者みんなで振り返る。

ステップ2

振り返り記録

振り返り記録
11月 3週目
タイトル「ころもりごっこ」

1 どのような視点で選んだ写真か
①子どもの個性が際立っている場面 ②一人一人の姿が写っている場面
③大切にしている保育・関わり・保育観が表現されている場面

②ごっこ遊びを通して、様々なことを経験し楽しんでいる場面
身近な物を使って自分たちで遊びの場を作る。友達と同じ場で遊ぶ。ころもりになって動く、遠くまでボールを投げる（入る、獲る、目を狙いに行くなど）、様々な種類の動きをする、面白いやり方を試みたりと楽しんでいる。相手様・相手年の友達と関わる。

2 分析
分析の観点：(a) その場面を選んだ理由 (b) 実践の観察と子どもの育ち
①(a) ひとつひとつと楽しくなるための過程で、意図的に観察し、記録し、記録にしたこと。
(b) ビールケースやボール、太鼓、ごっこなどを使って「ころもりごっこ」の遊びの場を作る。
(自由・協同性) それぞれにころもりになって動く。(言葉による伝え合い・豊かな感情と表現) 動物にころもりの姿をまねたり、なりきっていろいろな動きを楽しむ。(言葉による伝え合い・豊かな感情と表現) 「ごっこ」から入る。ここで「獲る」というイメージを共有している幼児もいる。(言葉による伝え合い・協同性) 「目を狙いに行きまーす」と言いながら運動中を繰り返す。(健康な心と体) 設定道具に慣ら下がら、友達や先生と一緒に遊んで自由に遊ぶことを楽しむ。(健康な心と体・協同性・保護者の関与)

②(c) 観察にも遊びの場を作る時に使える物を増やすなど、環境の工夫ができていない。

3 話し合わせたこと
・同じ場に集まっているが、個々でころもりの動きも異なり、楽しんでいることは様々である。
・担任が保護者ならではの遊びができるように、教師同士で必要な物を揃えることも検討としていた。ラテックス、お風呂の椅子、滑り台、外遊び靴が揃っていない。滑り台も手も砂場用にあるとよい。変化しない置き場があるといふ、非常用台下下に物を置くことよい。
・友達との関わりも育ちを受け、自分と同じように作る事が出来る。年少時に友達や友達と関わりあふれたい遊びを経験すると、年長になってから自分たちで楽しめるようになるのではない。

- <多角的で実践的な振り返りをするために>**
- 3つの視点で自分の保育の写真を取り、振り返りや週案の打ち合わせ等に活用する。
 - 写真を載せた振り返り記録のフォーマットを作り、各自が実践を記載する。
 - 分析の観点は以下の3つとする。
 - ①「選んだ理由」
 - ②「コンパスの視点に沿った幼児の育ち」
 - ③「もっと良くなるための手立て」
 - 記録の内容について、みんなで話し合い、保育の改善点について考える。

- <実践後のご指導>**
- 「写真」を活用したことで保育を焦点化することができ、それぞれの保育者の保育観が分かる。
 - 「写真」は情報量が多いため、振り返ることで撮影時に気付かなかったことに気付く。
 - 実践記録は、書式を揃えることで視点が定まり、読み手も共通理解しやすくなり保育を共有できる。
 - 撮った写真を見て振り返り言語化することで、感覚や感性だけではなく客観的論理的に捉え、整理することができる。
 - 記録をみんなで共有することで、内容が整理できる。保護者に遊びの意味や意義等を伝える際に、それが専門的な根拠になる。その過程が、保育の質を高めていくことにもつながる。

◎ 振り返りと今後に向けて ◎

- <成果>**
- カメラを1人1台携帯するようになり、気にとめた場面を自分で写真に撮ることが身に付いた。保育後写真を見ることで振り返りにつながり、日々の保育記録に活かせる。
 - 写真を入れた「振り返り記録」を書くことで、自分なりに客観的に振り返ることになり、幼児の成長や経験内容が具体化される。
 - 記録をもとに話し合うことで幼児の育ちが言語化され、育ちや実態を意識して保育ができる。
 - 写真があることで幼児の姿や環境、援助の内容など伝えたいことがよく分かり、内容を共通理解でき有効である。写真を撮り溜め、保育者同士で振り返ることで自分の視点とは異なる視点での気づきがある。話し合いを積み重ねることで客観的論理的に保育を捉えることができ、保護者に幼児の様子を伝える際にも分かりやすく具体的に伝えることができる。
 - 日頃から感じていた、園内の環境等についての疑問や改善したいことを、話し合う機会となった。
 - 今後、保育後の振り返りや週案の打ち合わせなどの際に写真を活用することを継続し、写真を用いた事例検討は、1学期に1回、2学期に2回、3学期に1回程度行えると負担なく継続できてよい。

相手の思いを知らながらも全職員が同じ方向性をもって保育を行う

◎年度当初の状況と課題◎

子どもの姿から育まれた過程においての経験不足を感じる場面がありました。また遊びにおいて集中できる環境なのか、子どもが自ら遊びを選べる環境なのかなど改善する必要を感じました。振り返りや現状を確認した上で、子どもの成長において連続性を持った経験の大切さについて事例を用いて語り合い、年齢に応じた今の子どもの姿から丁寧な保育を行うことで、育まれた子どもの姿を実感し、全職員が同じ方向性を持って保育が展開できるようにすることを大きな目的としました。

◎取組みの内容◎

リーダー会議で振り返りを行い、園の状況を確認しながら身近な課題から話し合いを進めていきました。5月に最初のテーマとして1歳児クラスの嘔みつきが続くことで『子どもの気持ちに寄り添う』ことの大切さから一人ひとりの子どもを理解し、応答的にかかわることで安心感を得て過ごせるようになり、徐々に嘔みつきが減少してきました。また保育環境は適切であったのかという意見から子どもの姿から発達の特性に合った環境が満足いく遊びにつながることを共通理解できたと思います。その学びを保育で行い、良かったことを付箋に書いて貼りだすことで、一人ひとりの思いが伝わりさらに共有できました。

プール遊びが近づく6月後半、着替えについて全裸にならない着替え方が大切であるが、4・5歳児の排泄時の姿や着替え方において『羞恥心』の育みについて振り返ると共に年齢別にどのような経験が必要なのか語り合い意見交換が行われました。このテーマの語り合いの中で目的としていた0歳児からの連続性を持った生活面での保育者の関わりが大切ということにつながりました。例えば着替え一つにしても0歳児から「一つずつ着替えようね」など言葉かけをしながら現在の姿に応じ、保育者が丁寧な働きかけ、言葉かけを行うことで、しっかり生活習慣が身についていき自分の身体を大切に思い羞恥心につながることを職員間で確認し、単発的な経験ではなく連続性を持った経験の大切さを共有できました。この学びから生活習慣・羞恥心についてグループディスカッションを行い、各自が大切にしていることや、クラスではこのようなことを工夫しているなど他の保育者の保育を聴いたり、現状での課題になっていることを話し合ったりしました。さらに感じたことや実践してみたことを付箋に記入して思いを共有しました。進めていく中で新たな課題が上がりました。付箋に書いて公開することで職員の思いを共有することは良いことだが、記入する人が限られている。このことから少人数で直接話すことで自分の思いを話してくれるのではないかと考え、昼礼後の30分に園内研修を行うことにしました。テーマは継続して生活面についてですが、今の子どもたちの姿からどのような経験が不足していたかに目を向けて話し合いが進められました。その中でそれぞれ他園での経験もあり、職員の思いや、やり方が違うことで意見をまとめることの難しさに気づきました。A保育士は0歳児のオムツ交換の時から毎回清潔感を心がけていたことが、幼児クラスになっても排泄後の始末の仕方に問題はなかったとの発言から意見交換が行われました。看護師から乳児期から沢山拭きすぎること、常在菌(良い菌)も拭き取ってしまうことも考えられる、との専門性を持った意見から、トイレトレーニングが始まった時に丁寧に伝え、習慣になっていけたら良いとの結果が生まれました。様々な経験や保育観によりこの事例だけでもまとめて答えを出して行くことの難しさがありましたが、意見交換をする中で全員が満足する結果につながったことは、同じ方向性を持って保育を展開できることにつながる成果だと感じました。園内研修を進めていく中で、生活習慣、羞恥心について思ったことを話し合うことで、職員一人ひとりが丁寧な関わりを意識する姿が見られてきました。0歳児からプライバシーにも配慮しておむつ交換をする、3歳児では着替えの方法を保育者が主導的に行うのではなく、子ども自ら行えるようにするために視覚でわかるようなイラストを貼るなど関わり方の工夫が少しずつできてきました。また、疑問に思ったことも職員から改めて質問が出るようになり、他の保育者の実践から良いと思った保育を取り入れたりする姿も見られるようになりました。それぞれが改善しようとしている変化が見られ、また園内研修に前向きではなかった職員からも興味を持ったことについて質問されるようになってきました。

6月30日第1回目となるコーディネーターの田澤教授と上田講師が訪問され、園内の見学と共に園内研修の進め方についての報告をさせていただきました。現状の進め方はとても良いので、これから良いものを作り上げて、財産になっていくのではないかと感じています。期、半期ごとなどに保護者に周知するとよい。また付箋を使った取組みについても、他の職員の記入したものに返事を書くなどやり取りを楽しむ方法も良いなど公表を含めたアドバイスをいただきました。このアドバイスが後の少人数で話し合う形に変更することにもなります。

2回目となる訪問では実際に園内研修の様子をご覧いただきました。テーマは2歳児の保育で、5月に担任が変わってからの数か月で、クラス全体が落ち着いてきたことから大切にしている保育者の思いを聴きました。着任時に生活面全般において一斉に流れ作業的に行うことを疑問に感じ、子どもの状況を確認しながら行っている。特に今は着脱について時間をかけて行っている。子どもの自分でやりたい気持ちを尊重しながら行うことで多少時間がかかることもある。そのことをもとにグループディスカッションを行いました。ディスカッションの後で各グループ発表をしましたが、その中で、同じやり方で統一されていけば子どもも戸惑うことがない。丁寧に伝えていくことで身につけていくと思う。2歳児だからこそ遊びの確保も大事だと思う。ただその挑戦に勇気を感じる、など発表されました。

田澤教授から、『互いに思ったことを話し合える肯定的な理解と評価ができる職場の環境づくりをしていくことが自己評価にもつながる。発表の時に、「うまくまとめられない」と困っている先生がいたが、それを言える関係が大事です。他クラスのやっている良い取組みを言い合えることが、園や保育の強みを見つけていくことにつながり、自己評価となるので、保護者にも公表し伝えてほしい。「こんなことをやっています」と伝えることで保護者とも話ができていく』とのアドバイスをいただきました。また上田講師からは『2歳児の着替えを丁寧にやることはとても大切なことで、先生方も言われたように、幼児クラスに上がってやり方が異なることなく統一することは子どもたちの力になっていくと思う。子どもたちの姿を一番分かっているのは先生方なので、子どもが楽しんで着替えに取り組んでいるか、取り組んでいる先生方がやっていて辛いのかと言うことが大事なのではないか。遊びを充実する工夫については着替えのこの部分だけ、この曜日だけ、とか決めても良いかもしれない』とのアドバイスをいただきました。11月に職員から午睡時間の保育者の役割について話したいと提案されたことで、確実に全職員の意識が変わってきていると感じました。12月の職員会議では今まで園内研修を振り返り感想を述べてもらい、その意見をもとに今後の園内研修をさらに全員が充実と共に楽しい時間になるようにしました。1月は絵本を題材にし、各グループで1冊の絵本をどのように保育に取り入れていくか企画してもらいましたが、どのグループも子ども理解が深まり早速実践してもらいたい内容でした。3回目最後となる田澤教授の訪問において、『園内研修のテーマは大きくなりがちだが、身近な問題を取り上げたことは観点項目が絞られ、色々な視点から考えていくことができるのでとても大切なことである』とご指導をいただきました。来年度にもつなげていきたいです。

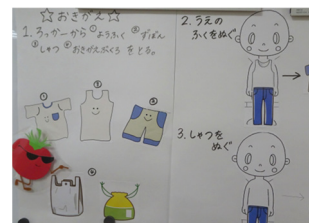
◎振り返りと今後に向けて◎

最初の頃は、固定の職員しか意見を出せない様子であったが、少人数のグループディスカッションにすることで全員が意見や思いを発表しやすくなってきたと感じている。なんでも話しやすい環境を作っていくことで、普段の会話でも保育の話が広がりやすくなっていくのではないかと考えている。今年度の成果としては、園内研修を通じてよいと思ったことを取り入れ多様な視点を一人ひとりが身に付きつつあることだと思います。自分で今何ができるか考え行動する姿が見られているので、一人ひとりが保育について考え続けていく意識を持つことができているのではないかと感じています。これからも生活面・発達や遊びに焦点を当て、目の前の子どもに対して何ができるのか、何が必要なのかを考え、環境を整え、意見を出し合い全職員が同じ方向性のもと、子どもの最善を考え続ける保育園でありたいと思います。公表について園だよりを通して保護者に伝えていましたが、さらに内容を深め報告することや保育士だけではなく栄養士からも掲示することで、保護者会では子どもの成長と共に、クラス集団としても成長を感じると評価をいただきました。これからも保護者との協働的な関わりの中で子どもの成長につなげていきたいと思っています。



グループディスカッション

掲示の工夫



子どもも大人もワクワクする楽しい保育園をめざして

◎年度当初の状況と課題◎

保育士自身が保育を楽しみ子どもがワクワクする保育の機会を設けたく、昨年度は幼児クラス中心に「しもうまゆうえんち」を実践した。この経験をベースに、今後も職員が前向きにモチベーションを維持しながら「しもうまゆうえんち」の取組みを進めるためのヒントを得たい。



◎取組みの内容◎

<1回目 9月6日>

- ・幼児クラスコーナー遊び「しもうまゆうえんち」での子どもの写真を用いて保育を語り合った。語り合う中で、子どもの気持ちに着目し次への保育の手立てを見出す機会となった。
- ・自園の持ち味や不足していた領域に気づくことができた。(感触遊び、全身を使った遊び)
- ・コロナ禍で「できない」ではなく「できること」を探る思考が、新たな保育を生み出すことに気づいた。
- ・コーディネーターの先生と語り合いながら、子ども主体の保育を考えることができた。子どもの気持ちや遊びの展開など、今日の経験が明日の保育につながる意味を理解した。

「サマーランド」



<2回目 11月14日>

- ・10月末に開催した「しもうまゆうえんち・秋まつり」について、5歳クラスより取組みの経緯とその後を発表しながら振り返りを行った。
- ・子ども達の姿、心の動き、異年齢との関わりの場面についてクラス便りや写真、子どもとの“相談会”で使われた実際のウェブマップなど参考にし、共有を図った。意見交換が進むと次第に保育士の援助の方向性が見えてきた。子ども主体の活動に大人はどう関わったらよいのか、例えば子どもが期待をもてるよう紙面を用いて「見える化」など年齢に応じた工夫が必要であり、ハプニングなど想定外のことを乗り越えることで非認知能力の育みにつながる、異年齢児との関わりは自然な形でお互いが関心をもてるよう見守っていくなど、具体的な支援の在り方を学んだ。

年長クラス
お店屋さんごっこへ向けた相談会



※3回目 2月15日

◎ 振り返りと今後に向けて ◎

～ 11月14日 コーディネーターの先生との語り合いで印象に残った言葉～

- ・子どもの声を拾いながら活動を進める際、子どもの引き寄せ方や活動の区切りの見極めがポイントである。子どもの声を大に取り入れつつ、大人の意見もタイミングをみて伝える、交通整理をしながら一緒に進めていくことが大事。
- ・大きなクラスの子が盛り上がっていると小さいクラスや園全体にそれが広がっていく。
- ・「10の姿」があって活動を決めるのではない。
子どもがワクワク取り組んでいる活動には「10の姿」があとからついてくる。

「お店屋さんごっこ」



コーディネーターの先生と保育の振り返り



< 保護者への公表 >

- ・12月の園だよりにて「しもうまゆうえんち」の取組みと、今年度のコーディネーター訪問を通じた保育の振り返りや職員の学び合いについてお知らせし、取組み全体について保護者の声を自由意見という形でICTを活用したアンケートを行った。アンケート集計をファイルし、閲覧できるよう事務所に設置した。さらにアンケートを受け、今後への方向性を後期の保護者会にて伝えた。
- ・アンケート回収率は67%と多くの声をいただいた。乳児クラスの保護者の方からの声が、予想外に多く、「しもうまゆうえんち」が幼児クラスに限らず、全体の取組みとして期待していただいていると受け止めた。まさに幼児クラスのワクワクが園全体に浸透している表れと捉えた。また、コーディネーターの先生と保育の振り返りを行っていることへの感心の声もいただいた。こうした保護者からの声を受け、今後も保育の可能性を模索しながら子どもの姿を中心とした「しもうまゆうえんち」を進めていきたいと保護者会にて伝えた。
- ・保育士が保育を語り合い、明日への保育の手立てを見出していくことの楽しさを感じた。子どもの笑顔を想像しながら「こんなことしたい、あんなことしたい」と次への保育を描き、仲間と実現させていくことを継続していきたい。

「しもうまフェス」



目の前に子ども達の笑顔。
保育が楽しいと実感！

『幼児の縦割りグループの
ポスター』
「見える化」「わかりやすさ」
を意識して作成。



職員同士の語り合いの時間や課題に対しての問いの方向性を考える

◎年度当初の状況と課題◎

【自己評価に関する園の取組みの現状】

保育実践を記録に残し、その後の振り返りや次回への目標を見出していくようにしている。記録は繰り返し見ていく中で、新たな気付きや子どもの発達を発見している。

【園の実践で課題と感じていること】

ミドルリーダーを中心に振り返りや課題を取り上げているが、経験年数の浅い職員の気付きを次の保育目標に持っていくプロセスが不十分である。

◎取組みの内容◎

ミドルリーダーの資質向上に向けて現在使っているチェックリストの項目の内容と意味の確認と見直しを目的として取組みを始めた。その過程で発生する対話から共通理解や後輩職員の指導に及んでいった。技量や理解に当てはまっているか、理解しやすいものになっているか、項目として必要性があるか等、ひと項目ごとに精査していった。その過程で、共通見解を持つことに重点を置くことに注力しすぎてしまっていた。田澤先生から、項目内容がどのような意味合いが「対話」をしていくことが何よりも大事である、と意見をいただき、今の自分たち（ミドルリーダー）に必要な項目を選んでいった。また小さい声を拾うのは、その場での発言ではなく事前に書いておくと拾いやすくなる。話し合いが慣れているのであれば一つ一つじっくり取組む時間が足りなくなるので、付箋を貼って次々に進める方法、3時間で一気にやるのが良いか、少しずつやるのか、園がやりやすい方法、慣れた方法で進めて欲しいなどの意見もいただき進めていった。

田澤先生の指導を受け、全12回の評価項目見直しの取組みを行ってきた。

1. 園の運営組織貢献力に関する理解 大項目6 小項目28
2. 保育内容 大項目7 小項目22
3. 危機管理 大項目5 小項目20
4. 子育て支援 大項目2 小項目24
5. 職員の資質向上 大項目4 小項目11

自己評価の観点、公表の方法については、項目を精査しているだけでは方法論になってしまう、どのような意味があるのか、何故この取組みをやっているのかを立ち止まって考え、足場を確認することも必要である（振り返り）と意見をいただきました。取組みの過程をSNS等で公表はしていた。しかし、保護者に向けて保育の意味を考えあう職員集団の姿は伝えられていなかった。年度末のクラス懇談会の中で職員の研修と取組み、保育の意味を紐づけ報告した。

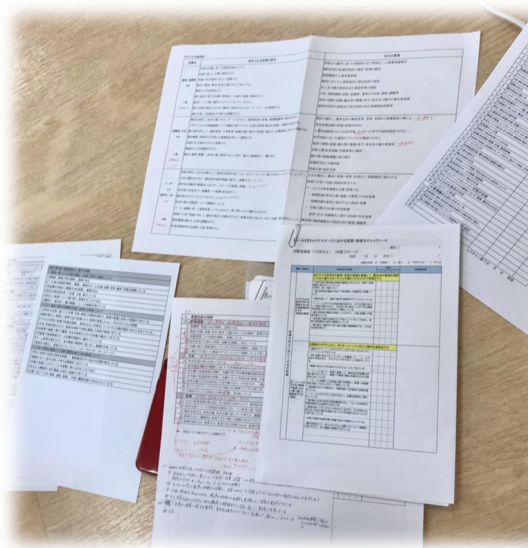
◎振り返りと今後に向けて◎

まだ、項目は完全に精査されていない状態であるため、今後も「作成、実践、振り返り」を繰り返し、進んでは戻りながら試行錯誤していくイメージを持っている。この取り組みは、ミドルリーダーが自分の保育を振り返り、言葉で表現し合うことで目指す姿の共通認識を持つことに一定の評価ができる。他者との関係と理解、業務や保育を確認する自己評価の幅を広げ保育の質をどう上げていくのか？ということが次の目標である。

全12回の取組みと、コーディネーター事業を通していただいたアドバイスを受け、ミドルリーダーの資質として必要な項目の見直しを行ってきた。今後は年次別項目を精査する、災害に関する危機管理の分野の見直し（新規作成の必要も視野に入れる）、新任職員（1～3年目）の項目を適正なもの（適正とは何か？も含め）見直しを行う。

その過程で生まれる対話や意見の相違に疑問を持ち、問いを立て、また語り合っていく。

今後はこのテーマを持った豊かな語り合いの取組みを他の職員にどのように伝え広げていくのが課題になる。ミドルリーダーが言語化し、意味を咀嚼し、後輩に伝えていくことは保育の面白さを伝え合うことにつながる。子どもを中心に保護者、地域、園が豊かな生活の場となるよう次年度以降も取り組んでいきたい。



子どもも職員も楽しいと感じる保育を目指して


◎ 年度当初の状況と課題 ◎

- ・毎日クラスで子どもについて語り合う時間を意識して行ってきたことで、職員が自分から発言するようになり、保育の振り返りにつながっている。しかし、子どもの主体性を大切に保育したいという意識は感じるものの、何をどうすればいいのか具体的な保育の実践の仕方がつかめない様子がある。
- ・保育の課題、悩みを出し合うことも良いが、保育の楽しさを職員自身が感じられるようにしていきたい。

◎ 取組みの内容 ◎

毎月のカリキュラム反省の方法を変更
 写真を使って、その月にクラスで何を大切に保育を展開してきたのか、子どもたちが夢中になっている様子などをわかりやすく伝える形にした。

園庭の畑や自然物遊び・野菜くず遊び
 保育士が環境を整える中で、子どもたちが遊びに夢中になる様子が見られるようになってきた。




- 自分たちが環境を工夫する中、子どもたちが主体的に遊びに向かう様子に少しずつ保育の手応えを感じられるようになってきた。

【1回目訪問：6月】
 コーディネーターと振り返りをする中で、園の強み「子どもたちと丁寧に関わり、気持ちを受け止めた保育」「大人同士の関係性が良好であること→子どもにも伝わる」を感じることができた。

- 充実に向けた検討：自園の保育が子どもの姿から保護者に伝わるように言語化・明文化していく。（クラス便り・保育 Web）→子ども理解が深まり、保護者も子育てが楽しいと思ってもらえるようにしたい。

毎月のカリキュラム反省
 クラス便り・保育 Web を通してクラス活動を伝える形に変更。コンパスの活用→他クラスのお便りの作り方や保育の視点に刺激をもらうようになる。

園内の環境改善（ミドル2年目研修・マネジメント研修を受けて）
 園庭の遊具を子どもたち自身が取り出しやすいように改善。1歳児室のコーナー遊び設定。
 →子どもたちが自ら遊具を選んで遊びに向かう姿に変化してきた。



- 保護者に子どもの様子を伝えたい気持ちが強くなり、必然的にお便りの配信が増えていった。
- 安全面を最優先で保育していたが、お便りを作成することで子どもの様子やつぶやきに集中するようになり気づきがたくさんある。
- お便りを作成することで再度そのシーンを振り返ると、その時は夢中で保育していたことも落ち着いてフィードバックができる。（子どもの気持ち、次にどうつながられるか等）

【2回目訪問：10月】
 子どもの様子を「伝えたい」「書きたい」という気持ちが大切なので、お便り作成が負担にならないといい。クラス便りを通してクラス内だけでなく、事務所や他クラスと自然に対話ができていることが保育の振り返りになっている。

保護者への公表（事務所便り→クラス便り・保育 Web についてアンケートの協力）

「何を大切にしながら保育しているのか」「どんなねらいを持って保育を展開しているのか」など保育のプロセスを言語化・明文化して伝えたいと考えてきたことを明記した。



● アンケート回答より（回収率：78%）

「いつも子どもの様子がわかりやすいクラス便りを楽しみにしています。活動の目的も記載されているので共通理解でき、園の様子がよりわかりやすく、クラス便りを見ながら子どもと会話が弾んでいます。」

「子どもによって反応が違うこと、その反応に合わせて関わりを変えてくださっていることがわかり、保育 Web は感動しました。」

「子どもの話を聞くだけではわからないことも知ることができて嬉しい。夫や祖父母とも共有している。」

● 保育を家庭と共有することが子ども理解を深め、良好な親子関係へつながっていることが感じられた。また、両親だけでなく祖父母にも保育内容が伝わり、子どもの育ちを共有できていることもわかった。

【最終訪問：1月】

公表の際、子どもたちだけでなく、色々な視点でやっていることを言語化しわかりやすく伝えるといい。また、年間反省時にもコンパスを活用し、次年度への改善点など話し合えるといい。

保育を共有することが親子の関係性にも良好な影響を与えていること、先生方が子どもを深く見つめる目が、保護者が子どもを見る目へ影響を及ぼしていること（おそらく、保護者が子どもの姿を肯定的に捉えることへとつながっている）を感じた。また、ご家族や親族との共有が広がることで、子どもの姿を共に喜び、育ちを支える基盤がより強固になっていくのでは、と思う。

◎ 振り返りと今後に向けて ◎

【公表を通じてのご意見を受けて】

その時々配信の折に感想をいただくことはあったが、公表し意見を募ったことにより、クラス便り・保育 Web そのものに対して保護者がどのように感じているのか、受け止めているのかを知る貴重な機会となった。園の保育を理解してもらうために、子ども自身が一番夢中で遊んでいる日中の様子を、保育のプロセスを絡めて伝えることの大切さを実感した。今年度は教育・保育実践コンパスをかり反省時に活用してきたが、お便り作成の際にも年齢の発達などコンパスで確認すると、子どもの育ちが保護者にさらに伝わりやすくなるのではないかと感じた。

次年度に向けて、よりひとつひとつの活動の保育のねらいが伝わるようなお便り・保育 Web 作成を目指したい。

【実践充実コーディネーター派遣事業を受けて】

今回の訪問を受けて、自園の取組みの良い部分を様々な視点から認めていただき、職員の大きな自信につながった。4月からまず“職員自身が楽しいと思える保育を目指そう”とかり反省の方法を変えたり、職員から意見を募ったりしてきた中で、少しずつ職員の気持ちが前向きになってきたことは感じられていたが、実際にどのくらい職員に届いているのだろうと思っていた。訪問の際、職員間の語り合いの内容・人材育成への思いなど、普段聞くことができなかった職員の気持ちを聞くことができた。コーディネーターの支援を受けたからこそ、職員の思いを引き出すことができたと思う。また、職員が保育実践の中で、外から教えられたのではなく自分で気づいた学びがたくさんあり、確実に自身の成長につながると思うと本当に嬉しい。教育・保育実践コンパスを繰り返し読むことで様々な気づきがあること、保育の質向上につながるなど実感できた。

子ども理解につなげる保育の振り返り

◎年度当初の状況と課題◎

昨年度、5歳児クラスが先行してドキュメンテーションを日誌として記録し、日々の保育の振り返りを行ってきた。日々の保育を振り返り、より良い保育実践につなげていくために、今年度は、他クラスも実践していく計画を立てている。職員が意欲的に取り組めるよう、職員間で大切なことを共有しながら進めていくことが課題である。

◎取組みの内容◎

自分たちの保育を振り返り、子ども理解を深めたい

<訪問時のアドバイスを受けて>



☆昨年度、子どもが主体的に遊べるように、環境を整えてきた経緯がある。ドキュメンテーションと並行して、一人一人が夢中になれるような環境を整えることにも、継続して取り組んでいく。

<課題>

- ・空間全体を上から見てみる意識を持ちながら、子どもの姿を把握し、一人一人が夢中になれるような環境を整えていく。
- ・子どもの動線を考えながら、やりたいことをいつでも楽しめるような部屋の使い方を工夫する。
- ・テラスも含めた効果的な環境設定を考える。

<取組み>

① 環境の見直し

- ◎各クラスの環境に関する問いに対し、他クラスから疑問や質問を出し合い、意見交換をする。
- ・新たな環境設定の中での各コーナーのねらいや大切に考えている点、設定の工夫について報告し合う。
- ・子ども達が何に興味を持ち、何を求めているかを考えることの大切さや、動線の工夫も必要であることを確認する。

② 俯瞰図の活用

- ◎各クラスで俯瞰図を作成し、子どもの姿の変化等を踏まえて、課題を見出す。
- ・子どもの姿に応じて設定を変化させたことで遊びが広がった。子どもの興味関心に応じた設定を変えていく必要性がある。
- ・日常的な環境整備（棚の上の整理整頓等）が十分出来ていない。
- ・物の扱い方や片付けの習慣に個人差がある。



子どもの姿	おんい(保育士の思い)	手だて(保育士のかかわり)	振り返り(評価・次へ向け)
① 制作好きな子が多い。空き箱や紙などの素材を使い自由に作りたもので遊んでいる。夢中になって材料が豊富になり、片付けもせずそのままになっていることが多い。	・友だちと一緒に作る楽しさも感じて欲しい。 ・工夫して作った物を見て興味を持つ。 ・片付けやすい方法を知らされか自ら片付けをする。	・テーブルを2台くっつけ、周りに椅子を置き、一緒に作っている友達の様子を見えるようにする。 ・色鉛筆を色分けする。 ・作ったものをしまえる個人引き出し、ゴミ箱、リサイクルボックスを並べて置く。 ・材料や用具を小さなトレイに入れてテーブルまで持っていくようにする。 ・テーブルの上に小さなゴミ箱を置く。	・友達と相談しながら遊びながらお家を作りそれを使って次の日一緒に遊んでいる。 ・友達を作っているのを見て、今まで興味なかった子も制作する事が増える。 ・自分の物を引き出しにしようようになったが、立体の作品が増え、引き出しに入らなくなって行く場所が増える。 ・作品作りが楽しいが材料を無駄にしてしまう姿もあり、工夫の工夫が必要。
② 絵本を読んでいる子。図鑑を使って絵を書きそれを遊んで遊んでいる子がいる。それぞれの遊びが同じスペースにあつて、窮乏そう。	・絵本を読みお話を世界を楽しむ。 ・絵本作りや図鑑作りを友達と一緒に楽しむ。	・絵本棚と制作の場所を近くにする。 ・物語本と制作して読める場所に設定する。 ・図鑑はそのまますみこまの近くに置く。	・絵本を写して塗り絵をしたり、紙芝居を作る遊びを楽しんでいる。 ・図鑑の恐竜や動物を写して切り、動かして遊ぶ。 ・お料理の本を友達とみて、レシピを写しアップの計画を立てる。

うさぎ(3歳児) 組



子どもの姿	おんい(保育士の思い)	手だて(保育士のかかわり)	振り返り(評価・次へ向け)
・保育室全体を上から俯瞰して見たときに、部屋の向かって左側に子どもが集中していることに気づいた。 ・人数が集中してしまうことで他児の遊びを邪魔してしまったり、距離が近くトラブルになることも多い。 ・ままごと・制作遊びの内容が飽きてしまっている。	・落ち着いた環境の中で、子どもたちがそれぞれ遊びたい遊びを十分に行えるようにしたい。(少人数で) ・ままごと・制作の遊びがより深まり、楽しい遊びとなるようにしたい。	・右側の制作コーナーを充実させる。(形に切った紙・の色鉛筆・塗り絵・シールを用意する) ・ままごとを料理遊びとお医者さんごっこ2つのコーナー設ける。ままごとには布ものやサラダ・サンドイッチが作れる素材を用意する。お医者さんごっこには、道具を整理して用意し、小さな椅子やテーブル、仕切りを用いて雰囲気を作りやすいようにする。	・制作コーナーを充実させたことで、子どもたちの表現の幅が広がり、自由を楽しむ姿が見られる。また全体制作で使った素材などを引き続き設定することで、それをもっと使い方を工夫して楽しむ姿が増えたこと、道具の使い分け、作った作品の管理が課題となっている。 ・ままごとは素材が増えたことで、遊びが変わり、料理作り、きれいにできるように遊ぶなどの楽しみ方が増えている。成長とともに役割も明確になり2-3名での遊びを楽しんでいる。お医者さんごっこも、備がわかりやすくなったこと、保育士も一緒に遊ぶことで役割や道具の使い方がわかり楽しむ姿がある。

しか(4歳児) 組



子どもの姿	おんい(保育士の思い)	環境設定	振り返り(評価・次へ向け)
① 虫が好きで、園庭で見つけた虫を飼育ケースに入れて観察をしている。 ・「育ててみたい」と言っている飼育ケースに入れて。 ・他の友達に取られたいという下駄箱の上に乗っている子が多い。	・友達と一緒に成長を楽しみにし、生命の大切さを知る。 ・虫の扱い方を知る。	・子ども達が見える、手が届く場所に飼育ケースを置く。 ・毎日保育士と一緒に虫のお話をし、発見や気づきを共有する。 ・何の虫かを調べるための図鑑だけでなく、飼育の仕方に関する必要用具もそばに置くようにしていきたい。	・ケースに手が届きやすく置いた虫をすぐに自分たちでケースに入れ観察することができるようになったことで、遊んで終わるのでなく興味や関心が虫を飼育するようになった。 ・何の虫かを調べるための図鑑だけでなく、飼育の仕方に関する必要用具もそばに置くようにしていきたい。
② 積み木で遊ぶスペースが少なく遊びに広がりがない積み木で遊ぶ姿が少なかった。	・友達と一緒に積み木で遊ぶ楽しさを味わう。	・積み木の形をとり、衣装ケースに積み木を入れる。	・積木のスペースが遊びの場として拡大され、遊びが大きく展開されるようになった様子がある。衣装ケースを使用したことで片付けやすくなり、積み木遊びに以前より気持ちが向うようになった。

◎ 振り返りと今後に向けて ◎

- ・ドキュメンテーションと並行して環境の見直しも行ってきた中で、子ども一人一人の姿をしっかり見ようとし、自分達の保育を振り返る機会となっている。
- ・子どもの姿や遊びの展開に応じて適宜環境を変えていくことが、子ども自らが興味関心を持ち、遊びを発展させることにつながっている。
- ・物の配置や子どもの動線を配慮し、必要な時に関わる保育士がいることで、落ち着いた環境の中で遊ぶことができる。
- ・コーディネーターの先生とお話させていただくことで、違う視点で考え具体的な方法にも気づき、実践につなげられた。また、取組みの中で課題が出ることを前向きに捉えて取り組むことができた。

☆ 今後も職員間で子どもの姿を語り合い、楽しみながら取り組むことを継続していく中で、
子ども理解を深めていきたい。

認め合う・語り合う・共有し合う

◎年度当初の状況と課題◎

毎月のカリキュラム反省の方法を考え、クラスでポイントを絞って話し合ったり、全体でホワイトボードに付箋で貼り、共有した。悩みを相談するだけでなく、課題と改善点を出すことや、良いところ、自慢なども共有して認め合うようにしている。

課題を見つけたり、良いところを認めてあげたりするにも他の職員の保育を感じられる場が少ない。どんな環境でも、どんなにわずかな時間でも子どもを見る目や子ども中心の保育について意識し、日々の中で感動する心が持てるようにするにはどうしたらいいか、どこにポイントを置いたらいいか、職員全体で学び合いたい。

◎取組みの内容◎

【第1回訪問】

コーディネーターの先生に日ごろの保育や環境を見ていただき、園のカリキュラム反省会に参加してもらう。また、課題と思っていることに取り組むにはどのような方法があるかアドバイスをもらう。

- ・園の強み、課題をどう考えているか、若い職員も意見が言いやすい環境を作る。
- ・出た意見を尊重する。
- ・11月までの取組みから振り返り、2月に最終振り返りをし来年度につなげる。



アドバイスを受けて

園の強み・課題を全員が出し、経験年数別の3グループで取り組む課題を決める。

- ① 会議の持ち方・・・昼礼を15分、昼礼ノートは朝に出し、帰りに片付け、全員チェック
会議用の付箋を貼る期限とそれに対する意見を貼る期限の厳守
- ② 保育観の共有・・・クラス交換保育の実施、当番の役割シャッフル
- ③ 子どものかわいい姿共有・・・交換ノート方式（いつでもノートに書き、全員が見る）

【第2回訪問】

第1回後の取組みについて報告した上で保育を見てもらう。その後取組みの経過についての会議に参加してもらい、さらにアドバイスをもらう。

- ・課題で抽出したことが、運営に関わるが多く、保育の充実に関するものが少なかった。
- ・環境の強み、弱みについて考える。
- ・遊びの中の学びの豊かさをどこまで目的としているか。



アドバイスを受けて

保育の課題について考える。(クラスで深めたいが悩んでいる遊びは何か)

1 歳児・2 歳児・3 歳児……………ままごと

4 歳児・5 歳児……………ルールのある集団遊び

現状・課題・取組み・振り返りをわかりやすく入れ込める表を作成

【第3回訪問】

初めに取り組んでいた運営に関わることは継続していくことが大事ということで検証しながら取り組んでいく。新たに保育を深めることを抽出して見える化し、実践と振り返りを繰り返し表にまとめていくことを報告すると、それがまさしく自己評価であると言っていた。

その後の保育を見ていただき、午後から実践の振り返りの会議に参加してもらい、さらにアドバイスをもらう。

- ・保育の環境を整えることも大事だが、子どもたちの行動や言葉に心動かされる感性を持っているか。
- ・自分より大きい子のやっていることを見ているときの学びは大きい。その瞬間をとらえる。



アドバイスを受けて

- ① 運営関係での取組みの継続
- ② 遊びを深める課題の実践と評価の繰り返し (自己評価)
- ③ 園内で保育の研修をしている経過や報告を保護者にも共有する
(公表による自己評価)

◎振り返りと今後に向けて◎

今年度実践充実コーディネーター派遣事業ということで、保育を見られる、自分たちが評価されるという思いで緊張していたが、実際に取り組んでいることを専門的あるいは客観的に見ていただいたことで、子どもを見るポイントや保育の工夫の視点など新たな発見があった。自分たちの取組みが良かったことを認めていただいたことで自信にもなり、また、アドバイスを素直に受け入れることでさらなる学びにつながる実感が持てた。

保育を考える上では、運営と保育という大きな柱は分けて考えるほうが深めやすいことや、保育の中でも保育士の視点からと子ども主体の視点から考えることでより意見が出しやすく、保育士一人一人の保育観も出やすいと感じた。

今回の研修をもとにした南奥沢保育園の取組み

- ・テーマを明確にすること
- ・語り合うこと
- ・具体的な取組みを示すこと
- ・実施すること
- ・評価、反省、振り返りをし、次の課題を抽出すること
- ・保護者を公表する対象とし、その後保育に関してのアンケートを取るなどして、保育に反映させることを繰り返していく (今年度で形作り、来年度は自己評価の年間の計画として明確にしていく)

この繰り返しを職員一人一人が意識し、気づきを自然に共有できる集団にする。そのために、園長・副園長が職員を支え、ともに取り組みながら子どもの理解を深め保育の質の向上につなげていきたい。

もっと楽しく！もっと生き生きと！

◎年度当初の状況と課題◎

- ・昨年度、大幅な職員異動やコロナ禍で、職員が普通に保育の話をする機会が失われたところから始まった。「保育を語る会」互いの保育についての悩み、楽しさを話していく中で、園内交換保育や子どもたちに職員劇を披露するなど、保育実践につながった。今年度も「語る会」を継続していく。昨年度との違いは、そこで話し合われた内容を全体で共有するようにした。
- ・月間指導計画様式について変更。これまで画一的な内容になりやすく、クラスの中の保育が紙面から見えにくかった。保育の視点を具体化できるようにし、各クラスの保育におけるポイントがわかるような書式にした。
- ◆様々な取組みに対して前向きに取り組む職員層。（ミドル層も多い）経験者が中心となって保育を進めてもらえるような職場環境や職員が「保育の手応え」を感じられるような保育実践を行いたい。

◎取組みの内容◎

○現状・課題の把握

- ・日々のクラス保育の中で大切にしてきたこと（肯定的な面を中心に）について振り返った。
- ・月間指導計画の様式変更について、どのように感じるか。

以上について、コーディネーターの先生方と振り返りを行った。

- ・クラス保育、自身の保育についてどんなことを大切に、どう感じているかという話をしたが、指導計画とは違い「自分の保育を語る」形となった。自身で肯定的に話す＝自分自身を認めることにつながったと感じる。さらに先生方から良い点を具体的に言ってもらえたことで、職員全体の心がほぐれていた。「やっていることが認められた」ということの喜びに、職員の表情がとても良くなっていった。
- ・月間指導計画の様式の変更については、園内でその点について話をしていなかった。振り返りの中で視覚的にクラスごとの保育の方向性がわかるようになったことや書きやすさがあげられていた。

○改善・充実に向けた検討・実践したことやその経過

- ・保育環境の整備として、長方形という特徴的な園庭を使いやすいように花壇で仕切ってみることで、遊びの場所が自然と変わってきた。（砂場付近—ごっこを中心とした遊び。反対側は鬼ごっこのような動きの大きい遊び。）園庭の片隅に小さな野っぱらやビオトープ作りも行ったところ、虫や水生動物などを通して子どもたちの遊びの変化にもつながったと実感した。

保育の取組み内容が、実践コンパスにしっかりつながっているということもコーディネーターの先生から評価をいただき、実践に手ごたえを感じられた。保育の中で、さまざま苦労した点もあったが、子どもたちの姿や保護者からの言葉で取り組んで「よかった」という気持ちになれたことはとても大きい。



○コーディネーター派遣事業を受けての成果や見えてきた園の強み

- ・自分たちでは気づけていなかったが、1回目より職員の雰囲気が良い感じになっているとお話もあった。取組みを通して職員間の関係もさらに強まったと感じる。
- ・自分たちの保育を「どうだったか」と一人ひとりが言葉にすることから始まったが、実際の保育を見ていただいた上で先生方より助言があったので、より具体的に「できている」ことを明確にしてもらえ、自分（たち）の保育は大丈夫と太鼓判を押していただけたような気持ちにもなり、職員の自信につながった。
- ・会議の場でもミドルを中心とした職員の発言が積極的になり、活性化していると感じる。より肯定的な視点で物事をとらえることや「〇〇するともっとよくなる」視点での発言へと変化も少しずつみられる。
- ・まじめで物事に前向きに取り組む姿勢がある職員集団であるが、どこか遠慮するところもあったように感じていた。議論することが少しずつでもできるようになり、課題に向けてどうすべきかを一緒に考えていけるようになってきた。

【公表の方法】

- ・保育課で実施された「保育実践フォーラム」での発表用の映像を概要版として作りかえ、保護者会で見ていただいた。その後アンケートを実施。その結果を園だより（3月）にて保護者全体にもお知らせしていく予定。（保育実践フォーラムでの発表後、アンケートであがった内容を職員間でも共有していく）

◎振り返りと今後に向けて◎

○公表後、次につなげていくもの

- ・保育室の環境（ロッカーを外して広さを確保、室内の環境を整える）は継続していく。その際、子どもたちの姿からどのような保育室にしていくのかを十分に検討していく。
室内外の環境を整えることは継続しながら、実践に向けた取組みに移行していく。
- ・「砂場遊び PT」と「積み木遊び PT」の立ち上げを検討中。砂遊びや積み木遊びを通じて、子どもたちの育ちを支えていく取組みにしていく。⇒外部講師を招いての職員の学びやワークショップの開催など
まずは、職員が遊びを体感していくことや年間での進め方を園内で議論していく。

目指すは、

子ども自身がやりたい遊び・活動を思いきり楽しめる環境をつくること。

職員自身が子ども中心の保育を実現するために、わくわくしながら保育を進められること。



**子どもの主体性を大切にしながら様々な仕掛けを楽しみ、
私たちが主体性を発揮しよう。**

◎年度当初の状況と課題◎

・子どもたちの気付きに、どんな仕掛け（働きかけ）をすればより楽しくなるのだろうか。
なかなか実践につながらないので、実践に活かすための振り返りを深めていきたい。

◎取組みの内容◎

◆『保育士の働きかけで変化する子どもたちの様子を知りたい、聞きたい。』『子どもたちにどんな仕掛けをしたら（働きかけたら）、遊びがどう発展するのだろう。仕掛けるとは、どういうことなのだろう。』

その部分に視点を置いて実践、振り返りを行う。

コーディネーターより

1『仕掛け』には、5つのパターンがある。

- ①子どもの遊びを拾っての仕掛け
- ②子どもの横で大人がモデルとして見せる仕掛け
- ③子どもと一緒に考える仕掛け
- ④子どもに提案をする仕掛け
- ⑤口を出さずに見守る仕掛け

この①～⑤の仕掛けを
実践してみよう。

私たち

2実践していく中で、『なにか仕掛けなくては…』の思いが先行し、『子どもの今の姿』を見失っているかもしれない。考えすぎるあまり、子どもと一緒に楽しめていないかも…。

コーディネーターより

3子どもたちの『今の姿をベース』に…
今、子どもたちはどんなことに興味・関心を持っているのか？子どもたちの『今』に、とことん付き合ってみてはどうか。見守ってみてはどうか。

私たち

4基本をおさえよう。
『目の前の子どもたちの姿に
しっかりと向き合おう』

5（各自で・クラスで・全員で）実践→振り返りを繰り返していくと、様々な気付きが見えてきた。
各自が、各クラスが実際に取り組んだ仕掛け、その仕掛けによる子どもの変化した様子が具体化された事例（記録）が増えてくる。＝仕掛けようという意識が増してきた。

<事例：4歳児>～劇の役決め～ **子どもたちの意見を尊重することで気付くことができた。**

『〇役は〇人』と伝えて始まった話し合い。「じゃんけんで決める」「負けたら、別の役」という子どもたちからの意見でまとまる。全員の役が決まりかけ、じゃんけんに負けて別の役に決まった子から「やっぱり嫌だ。どうしても〇役がやりたい」との声があがる。「みんなで決めたことだから」と伝えたが「他の役は嫌だ」と強い意志。「どうしよう？」と子どもたちにぶつけてみると「みんなで決めたことなのに…」と困惑する声。しかし、しばらくすると「本当は私も〇役がいい…」と次々と声があがってくる。そこで話し合いのやり直しをする。そして『やっぱり自分がやりたい役をやろう』と全員納得で決まる。

➡「嫌だ」と納得していない気持ちを拾ったことで、何を優先するべきかを考えることにつながった。『人数のバランスよりも、子どもの納得した気持ち』を優先するべきであることに気付くことができた。

＜事例：3歳児＞ 見守ることも仕掛け

・年長児から刺激を受け、空箱で遊ぶことが増えた。でも、ただ所有しているだけの様子なので、何か仕掛けて発展させなくてはと考える。⇒（外部からの声）よく見てみよう。空箱を持って何をしている？

よく観察をすると、空箱の中に自分の描いた絵を入れたり、箱を集めたりして楽しんでいる。また、バッグやペットに見立てて友達と同じイメージでごっこ遊びを楽しんでいる姿があった。⇒今は、この姿を見守っていこう。見守ることが今、必要な仕掛けではないか。

➡ 所有した遊びが続いていたある日「箱がいっぱいあったら、ロボットつくれるね」という声があがる。
『今の遊び』に満足すると、子どもたちから『次はこうしたい』と、発展させようとするきっかけが出てくる。
そのタイミングを逃さずに新たな仕掛けができると、子どもたちが納得をした発展となるのだろうと思った。

◎ 振り返りと今後に向けて ◎

＜仕掛けを意識した実践、振り返りを通しての気付き＞

- ★保育士が遊びを「広げよう、広げよう」とするのではなく、子ども自身が広げていく方向にもっていきべきではないかということに気付いた。
- ★子どもの姿をよく観察をして、そこからどう発展させるか。子どもの今の姿から保育を展開するようになった。
- ★子どもから「やりたい」と始めたことは、あえて声を出さずに見守るようにしている。主体的とは『自分で考える・自分で決める・自分で行動する』ことではないか。自分で考えられる声かけをしていく必要があると感じた。
- ★保育士が指編みを始めると、子どもたちも興味を示して始める。レベルアップしてきた今、一緒に本を見ながら挑戦をしている。『モデルとなって見せる』という大人からの発信（仕掛け）が子どもたちとうまくつながった。
- ★4歳児のうちわ作りは制作の際、同じ素材、同じ工程でやりがちだったが、オニのお面は、様々な素材をそろえた中から自分で選んで自分のアイデアを形にする経験をした。自分のアイデアを尊重することの楽しさを子どもたちの姿から感じることができた。これらのような経験の積み重ねが次につながっていくのだと思う。

＜今後も・・・＞

- ★子どもたちの『今の姿』をしっかり捉えた仕掛けを実践していき、その振り返りからの気付きを、次の実践につなげていきたい。つながる振り返りとなるよう、『振り返りの時間』を充実させていこう。
- ★今回の『この取組みを活かしていこう』と、意識をしながら取り組めたこと、そしてその取組みを保育に活かしたことは、保育士の主体性発揮につながったのではないか。これからも、保育士も主体性をどんどん発揮して保育を楽しんでいこう。

振り返りを次へ生かし、園内研修の充実を図る**◎年度当初の状況と課題◎**

園内研修としてグループごとにテーマを持ち取組みを行っているが、取組み後の振り返りをどのように行うことで次への取組みが更に充実したものになるのかを学びたい。

- ・各々のグループで、取組みの振り返りをし、次の取組みをどのように行うか話し合っているが、自己評価という視点が十分ではない。
- ・園内研修での取組みの経過を定期的に報告・共有しているが、なかなか他のグループに対しての積極的な意見などが出ず、取組みの発展などが見られない。
- ・自分たちの取組みに対する振り返りや自己評価の仕方の理解・実践方法を知る。

◎取組みの内容◎

園内研修は、全体的な計画の中での特色ある教育と保育に掲げた「自分を大切にできる力」「関わる力」「体を育む力」「Hot Place」をテーマとして、経験年数の近い職員ごとのグループを構成し取り組んできた。

<園内研修の取組みのねらい>

- ・それぞれのグループで、子どもから見えてくる課題に向けて具体的なテーマを決めて取り組む。
- ・取組みによる変化を感じ、保育士が保育を楽しむことへ繋げていく。
- ・皆が他グループの取組みにも同じ熱量で参加し、意見を出し合える仕組み作りとそれをもとにした振り返りを保育に活かす。

<アドバイスを受けての取組み>

- ・グループ毎にテーマの見直しを行い、内容を絞り、より具体的にして取り組んできた。
- ・定期的にグループ毎で話し合いを行い、各グループの取組みを伝える場を持ち、職員に周知することで皆が活動を意識できるようにしてきた。
- ・周知方法として、取組みから見えてきた子どもの姿の変化を、写真を活用して伝えたり、全職員が使用する場に貼り出したりすることで会計年度任用職員の意識も高めるようにした。
- ・グループの取組みの報告をひと月に1グループとし、その報告からディスカッションで深め、クラスの枠を越えて全員保育を意識してきた。
- ・取組みの成果、子どもの姿の変化など、まとめ方も同じ形式を使用するなど、まとめの発表に悩まないように各グループが気負わず発表できるようにした。

◎振り返りと今後に向けて◎

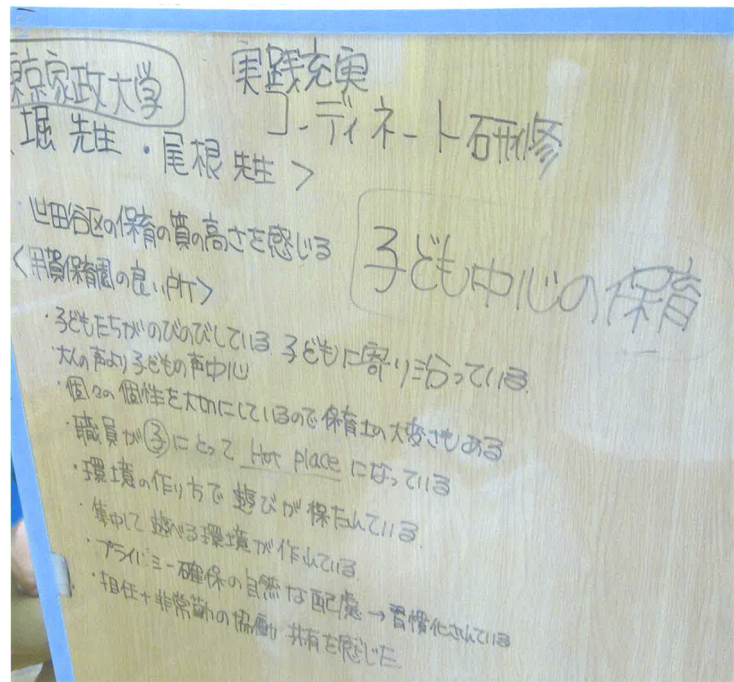
【振り返り】

- ・実践充実コーディネーター派遣を受け、堀先生、尾根先生にいろいろなアドバイスをいただいたことで、グループごとにテーマの見直しや具体化ができ、方向性が見えた。
- ・今年度は複数のグループで異なる内容に取り組んだが、一つのテーマを全職員で深めていくと良いとのアドバイスを受け、テーマを絞り、同じテーマについてグループごとに学びを深めていき、それを共有することでさらに内容について深められると感じた。
- ・園内研修を進める中で、子どもたちの姿が変化していくことが感じられ学びにつながった。
- ・ディスカッションの中で多くの意見が出され、さらに知識を高めていきたいと意欲が向上した。
- ・振り返りの経過記録などをまとめ、園だよりなどで保護者にも知らせ、保育園での取り組みや活動の共有を図ってきたので、今後も継続していけると良い。

【今後に向けて】

- ・内容を絞って取組むことも検討していく。
- ・今後も園内研修を通じて自己の知識を深め、保育についての話し合いの場を大切にしていく。

(語り合いの記録)



対話を通して保育を振り返る

◎年度当初の状況と課題◎

以前より、写真やウェブ、田の字法などを使って職員間で保育内容、保育環境について話し合う機会を設けてきたが、園にいる全ての職員が「子どもにとってどうなのか」という視点から、主体的に子どもたちとの関わりを考え、意識的に保育の充実、改善につなげてほしいと感じていた。

また、園内だけの子ども理解ではなく、保護者に対しても子どもの姿や育ち、保育の内容が伝わるような発信方法について、検討していた。

◎取組みの内容◎

○1回目の訪問日の内容

コーディネーターの先生方に園内の保育環境や園独自で実施している子ども理解を共有する会議についての内容、期ごとに行う職員の田の字法による保育の振り返り、保護者に向けた保育の様子や子どもの姿を掲示しているポートフォリオ等を見ていただいた。現状の取組みについては、コーディネーターの先生よりお褒めの言葉をいただいたが、園として職員が意識できる自己評価への取組みについて、助言をお願いする。保護者への保育内容の発信についてできることを行っていききたい旨を共有し、終了した。

○訪問後の園での取組み

園内で現状のポートフォリオ等の掲示物の頻度を上げることや、今まで以上にアンケート等の実施を行っていくことなど案が出た。しかし一方では、お迎え時間が重なり合う時間帯ではポートフォリオがじっくり見ることができない点や、小規模園で玄関が狭いため、掲示する場所も少なく、保護者からも見えにくくなってしまおう点、また、アンケート等もかえって保護者の負担になってしまうことがあるのではという問題点も出た。

それらの点から、法人内でも検討し、来年度 ICT を導入し保護者に向けてのポートフォリオや、簡単なアンケート機能などを、保護者のタイミングで見たり、回答できたりするような仕組みを作ることとなった。そのため、当初の予定を変更し、今年度はその前段階として現在行っている会議や自己評価、保育の振り返りの中で保護者に子どもの姿と保育の内容が伝わるような発信方法や、伝え合うポイントを中心に“語り合い”を進めることとなった。

○改善に向け実施したことと課題

①目に見える子どもの姿や写真に写る姿だけでなく、目に見えない心の育ちに焦点を当て、言葉で伝え合うようにする。

【課題】目に見えない心の理由を保護者が共感できるような言葉、伝え方にしていきたい。

②保育者の思いや保育の意図だけではなく、子どもが本当に求めていることを真ん中に置いて、保育者が人的環境として与える影響について話し合う。

【課題】私たち大人の関わりの中で大切なことは何かを考えながら、保護者が共感できる共有方法を考えていきたい。

③ファシリテーターを中心として、話し合いを進め、保育者全員の意見が反映される保育環境作りをする。

【課題】次世代のファシリテーターの育成をどのようにしたらいいのか、難しさを感じている。

○2 回目の訪問日の内容

自園で取り組んでいる環境会議（ファシリテーターを交えて写真から子どもの姿を語り合い、園全体で子ども理解を深めていく会議）に出席を依頼し、上記の課題について助言をいただく。

自園での子ども理解を深める会議でコーディネーターに、感想・助言・指導をいただくことができ、職員の意識向上につながる機会となった。

○コーディネーターより感想

・非常に有意義な新しい会議、バズセッションをしていく中で生まれる職員同士の自己評価がしっかりできている。また、ファシリテーターを通し、写真から子どもの心情意欲を掘り下げ、広げていくことが出来ており、子ども理解と職員の共通理解が深まっていった。

・職員が主体的に保育に関わっている様子が、会議から感じられた。

◎振り返りと今後に向けて◎

○コーディネーターより助言

助言① ファシリテーターの後進育成について（外部からのファシリテーターではなく、今ある雰囲気を活かし現場の中で後身を育てていくことが大切である）

今後に向けて→次回会議より職員の中から2名程ファシリテーターを選出し、本部保育アドバイザーと共に会議を進めていくことで、自己評価につながる会議の発展と後身の育成につなげていく。

助言② なぜこの写真を選んだのかを明確にする（選んだ理由を先に述べていくと良い）

会議の中でその問いを先に出すことで、他の職員へ主体的に発信するきっかけになるのでは。

今後に向けて→語り合いの中で自由な意見が出にくい場合がある為、ファシリテーターが対話を通して、職員の想いを拾い上げ、考えを広げたり、理解を深めながら、子ども理解や自己評価につなげていきたい。

○保護者との共有を深める取組み

次年度以降も、職員が取り組んでいる保育の環境構成や研修の内容なども、保護者に視覚的に伝わる方法がないか引き続き検討していく。

対話を通して保育を振り返る会議（わかちあい会議）

実施日： 毎月1回

実施時間： 午睡時間

参加職員： ファシリテーター1名

各クラス担任1名

栄養士

園長



**世田谷区教育委員会事務局
乳幼児教育・保育支援課
(乳幼児教育支援センター)**

〒154-0023

世田谷区若林5-38-1

電話番号 03-6453-1531

ファクス番号 03-6453-1534

